

表紙, 目次, 雑録, 雑報, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38383

明治四十四年五月十五日發行

十全會雜誌

第六十四號

全澤醫齒學專門學校十全會

十全會雜誌第六十四號目次

○原著及實驗

●結核病治療ノ最近進歩。

ドクトル 竹中繁次郎氏

●肺摘出后ノ瓦斯代謝。

ドクトル 竹中繁次郎氏

●肺摘出ニ於ケル殘肺ノ顯微鏡的検査。

ドクトル 竹中繁次郎氏

○雜錄

●本邦の製藥事業。●酒精讓道事業。●沃度尿中蛋白の検査。●脚氣の病原的研究。

○内地雜報

●昨年中の醫士増減。●藥劑官現在數。●在外本邦醫士數。●賣藥稅。●全國の溫泉。●大坂市の病院。●日藥石川縣支部總會。●臺灣の醫事衛生。●陸軍の精神病者調査票。●新博士の學位申請論文及畧歴。

○醫校雜報

●新潟醫專の増員。●熊本醫專校建築。●宮城病院の落成。●臺北醫學校の成蹟。●奉天醫學校の開校期。●醫專校長會議。

○外國雜報

●獨乙の醫士數。●墺國々立母兒保育研究所。

○校內雜報

●柔道大會。●對一中校野球試合。●十全會東京支部發會。●本會員の日本醫學會出演者。

○漫錄

●故小原芳雄君遺稿。

八田 智 証氏

●高木塚磨君逝く。

中村欣一 郎氏

●弔猪飼善助君。

中村欣一 郎氏

○通信

●山本直技氏通信。●在京一同窓生通信。●淺利義治氏通信。●高木治安氏通信。●和田政範氏通信。

○人事

●高木塚磨氏の訃。●今村文碩氏の訃。●山崎教授。●高安校長。●石川教授。●松原教授。●本會員の學會參列。●金澤病院醫員の學會出席。●竹中繁次郎氏。●堀井吉平氏。●奈良八郎氏。●額又太郎氏。●寺田九十郎。●山崎太一氏。●今井外吉氏。●上木隆監氏。●古屋與三氏。●近藤清吾氏。●田山退一氏。●那谷與一氏。●中本和三郎氏。●荒川正雄氏。●高田信弘氏。●和田政範氏。●北陸醫會開會順序。

○會告

●在外特別會員會費領収報告。

○廣告

4. Christian Bohr, Die funktionelle Bedeutung des Lungenvolums in normalen und pathologischen Zuständen. Wiener med. W. 1907 No. 46.
 5. Christian Bohr, Zur Theorie der Entstehung des Lungemp-hysem. Centralblatt für die gesamte Physiologie u. Pathologie des Stoffwechsels, 1908.
 6. G. Zeulzer, Ueber Yagusneurose. Centralblatt f. die gesamte Physiol. u. Patholog. d. Stoffwechsels, 1908.
 7. Alfred v. Sokolowski, Klinik der Brustkrankheiten, 1906. A. F.inkel, Die Respirationkrankheiten, 1903.
- 竹中氏論文附圖三ノ印刷ノ都合ニヨリテ省略セリ

* * * * *

漫 録

● 故小原芳雄君遺稿

八 田 智 証

余は前號に於て故小原君の爲人々事蹟に就てものが知れる處を略記せしが萬一の誤謬を慮り一應岡本京太郎氏の校閲を経たのである、たゞ心元なきはわのが筆の拙さ十分にその意を盡すを得ず宵の嵐にいさゞ咲き榮へのふかつたことである

こゝに掲ぐる有賀學士の容態、高、中村兩君の感懐並に中島君宛の遺翰等は、私一個人の望としては是非一纏めとして前號誌上に載せ時に小原芳雄君追悼號にても題し度くひそかに思ふて居たのであるが、何分にも頁數の許さざるものあるこゝはゞ切期日後に到着せしもの多かりし爲め餘儀なくも本號に之か掲載方を願ふことゝなつたのである、然し余は小原君其人の爲に斯くも多大の割愛を快く承諾せられたる松原博士の好情を感謝すると共に、余が問ふ處余が願ふ處に對し御多忙をも顧みずそれ〱玉稿を賜はつた各位に向て深甚なる謝意を表するものである、殊に平素親交深かりし中島君宛の書柬は普通の知己友人に發したるものと異り同級同國と云ふ特別な誼より屢往酬せられたるもので、其の少しも隠す處なく且つ何等の飾りなき處は實に故人の眞骨頭を知り眞面目を窺ふにこゝろなき好資料と信するのである (八田註、以下全じ)

* * * * *

拜啓 未だ面識を得ず候故小原芳雄君病狀に關し全君令兄より貴下まで何か診察時の模様御報致すべく通知に接せしは今より約十日斗前にて候へしが小生も開業の身さて多忙に取紛れつい放擲罷在候處ふも本月十五日メ切この事胸に浮び候まゝ茲に取急き一筆申上候間何分よろしく御容捨可被下候尤も私も學術的の考を以て診察致したるにては無之單に臨床的の診察に止まるこゝに候へば胸部の變化等ほもさより大体に過ぎず候間右舍み被下度候

明治四十三年十二月廿三日突然電報來れり開き見れば「芳雄ヤマイ來診タノム眞一郎」とあり小生は奇怪の念に打たれ小原君は在京醫科大學に無事研究せらるゝ筈ふるに又意外の通知を故郷より得たるものかふこゝ先きに御地醫專校を退きし際は健康勝れずと聞きしが其後快復せし由聞きしに今突如此報に接し且つ驚き且つ疑ひ愴惶氏か郷里ふる上伊那郡中箕輪村に驅

けつき直に病床に訪づるや羸瘦せる顔貌の青白色なる呼吸促進して無力ある咳嗽の頻發して止まざる一見重態あるに一驚を喫し申候先つ其後の無音を互に謝するや君曰く「トウ／＼ヤラレテシマッタ」と此言を聞きし余か胸中斷腸の感に打たれ暫し答も出てさりしが殊更に「ナニ大丈夫！」と云ひつゝ靜に脈搏を検するに其數百二十以上而も小にして往々不正打診上右肺炎に近き部に於て空洞の形成あるものならん鼓音を呈し聽診上には高調ふる氣管支音を聽取せり他の右肺左肺ともに大小の水泡音を聽く宛に角臥位を取りたるまゝ寸許の運動も著しき呼吸促進を來し一言一句を發するすら困難あるか如く見受けたり聽診器を耳より去るや君又曰く「本年一ぱいにて片附だらう早くドーカ成つて呉れナケレバコマル」と實に君も亦最後の近づきしを自覺つゝありしものゝ如し而も從容自若として絶つて其死を悲むの風ふかりしには秀才の末路全情の念に堪えず思はず涕涙の頬に傳はるなとためあへざりき呼天龍の水悠々として語らず春秋多き有爲の士君も亦去つて歸らざるや呼嘯！

尙小生の小原君を往診せしは十二月廿三日なれば死去の日よりは二週間前に在り其後今一回往診の覺悟に有之候處一月六日急に死去の報に接し申候又小原君の初めて金澤出向の際に小生同伴したる次第にて爾來親交致居候昨夏來唯小生が一診したるのみにて其他には診察したる者一人も御座らざる候

右大略取急き申上候何卒御領承被成下度御申譯旁如斯に候

二月十四日

上諏訪町 有賀峰次郎

註、右は故人が東上以來その臨終にいたるまで前後唯一回診察を受けられたる有賀醫學士より當時の状況を報せられたるものにて、命旦夕に迫れる故人が自ら其の起たざるを知りつゝ死生に處して如何に從容として安住せしか髪髯として面のあたり見ゆる心知せらるゝ一層懐かしさに堪へぬのである、故人には初め *Peripneumonia* を患ひ次て

Peripneumonia に罹られたるも大に輕快せるにより東上せられたるものあるに、其後健康を失せらるゝや更に左肺をも侵したるものと思はるゝのである

拜復 故小原兄につき何か御書き綴りに相成る御心底の由結構のこと、存じます、御辛勞でも何卒貴下を煩はし度いものです、

却説小原兄逝去のこと實に驚き入るより外ありませぬ、前途有望の好青年多年の蘊蓄を啓發するの機にも接せずして墳墓に入りたりと思へば悲しき言語に絶する次第であります、殊に小生は多年の交誼を忝ふし今は實兄に別れたる如き心地致し暗涙滂沱として盡きませぬ、

小原兄は篤學篤行の士にして多方面に亘りて勉學せられたやうに思ふ、一年生頃より獨逸語に熱心で熟達せられたが、小生の交際し初めたるは三十七年頃菅草會を作つた時分からで隨分裨益を興へられた、小野慈善院がマダ彦三町の舊宅にありし時金澤病院からの施薬が途切れ、アワレ數十の飢病とに泣く同朋を顧みるものも無かつた際即ち施療投薬して之を救ふた藥局は小原兄の寓に置いたから従ふて同君の盡力は少ふかつた、同君は常識に富み謙遜を實であつたから能く小生の如き性急なものを容れて呉れた、菅草會は毎週一回會合したが小生の亂暴ふるゝ同兄の謙遜ふるゝは丁度面白いコントラストであつた、

梅原師(金澤監獄教誨師、現今京都眞宗中學教授)と小生とは下宿が同一であつて小生は其感化を受けた、當時小生は卒業の喜と生活の苦とが狭き頭内に混亂し最も人生の何たるかの解釋を欲求しつゝありし時であつたから大に梅原師の指導を受けて心中安慰を得た、喜悅のあまり平素親交ある小原兄始め貴下島中月原の諸士に相談し爲に結構なる會合を結ぶに至つたので、之は三十七年の暮から翌年に至り小生が御地を去り轉隊したときまでと思ひますが多分一ヶ月二三回各自の下宿で開いた事は御承知の通りと

思ふ、
東京では四十二年六月頃に初めて會つたと思ふ、同年夏は片山病(?)研究の爲め甲州へ出張せられ其頃の繪ハカキは今尙保存して居る、又東京へ來られてからも求道と云ふ佛教雜誌を讀んで居られたやうです、同兄は隨分言葉少かつたのこ小生の懈怠からして東京ではあまり信仰的坐談をせふかつたけれども、同兄は夙に因果説を信じて居られた、亦病身であつたけれども樂觀して居られた、恐らく精神修養の積まれた結果でせう、
かつて自分の不平と他人の悪口を發せられたことを聞かぬ、
世事萬端、よきにあれあしきにあれ前世の約束か、佛者の指令か、と思ひ取りて喜んで居られたことは時々語り合ふて知つて居る、
大學の病理教室では學士で、よいにも拘らず非常に真いテーマを貰ふた、申して居られたこともあつた、
僕の現に使用しつゝある聴診器は同君のこ交換したもので誠によい記念にあつたと思ふ、

最近の寫眞と思ふのは四十二年十一月頃のものにして小生所持致すにつき御用あらは御送附せん、之は山本幹雄兄と小原兄と小生の三人、日比谷公園に遊び記念の爲に附近で撮影したもので、其時の晝食はいろは樓で書生的に牛食數皿を平らげたことを今も忘れぬ、嗚呼實にあつた、思ひ出のまゝを筆にまかせて記した、順序もふく殆んど捕捉したい零碎なる談片ですから材料にも何にもならぬことのみと思ふも何卒御推讀御宥恕あれ、

二月八日の夜

能美郡寺井にて

高

伊三郎

拜復、小原の精神的修養に就て御尋ねに預りたるが御參考迄にその知る處の一端を申し上げんに、君には學生時代は一定せきりし様子にて時々小生と散歩の折書店より修身上の書籍を求めて讀む位に止まりしが、其の佛教に

趣味を懷き且つ之を信せらるゝ様にあつたのは丁度過くる三十八年一月八日君と小生と當時見習軍醫たりし高伊三郎君方に遊び雜談中計らず高君より小立野に梅原さん云ふ眞宗大學出身の方が居らるゝ故に時に信仰上の話を聽かるゝもよからんと勧められたのが抑の動機原因である、其後一月廿八日夜君と高君と小生の三人更に月原秀範君を誘ふて梅原師を訪ひ初めて信仰上の談話を聞いた、間もふく貴兄も加はり一月月に三四回宛初は梅原師寓にて次で各自の下宿にて之を開き歎異鈔の講義と云ふ、時に越村喜一郎氏も加はられた、然るに七月に入りて暑中休暇とある頃より一旦中絶せしも翌三十九年一月より再び梅原師寓にて無量壽經の開講あり、而も二月十四日、之が最後の會であつた、

以上の通り數次諸所に於て會合せし君には唯の一度も欠席した、こよく頗る熱心にてその信仰の篤かつたことは感服の外なかつた、君には非常に信仰心深かりし爲めか肉体上のここに一向重きを措かざる傾あり、少し位の病氣は意に止むるこもふく一心に勉強せられし故遂に健康を害する様にあつたことと思ふ、只その健康を害せし肉体は今や尋ねるに由ふとは云へ君の精神は悠久に永遠に存在致し居ることは生の確信して疑はぬ處である、

君の信仰は此の如く佛教的で基督教には趣味を持たれなかつたが、何事にふらず事毎に熱心親切清廉耐忍等の美德を具へた人で専門學の外信仰上修養書類を好んで讀まれた、即ち無藝の大勉強家にて時々菓子を澤山食ふ位が關の山、酒は飲めば飲める口はあつた様だつたが常に飲まぬ様につきめてられた

先者御返事まで、尙小生許には君の手紙少からず、いづれ取調の上御送附致すべきにつき御一覽の後には御手數御返戻を願ひ上げます勿々不考

二月十一日夜

中島

誠

謹啓陳者故小原兄の事に關し何か申上度候も、何を申すもはる、后輩たる小生に候へば御同窓の方々と異り故人の平生をも深く承知せず、從て逸事などごおこがまじきこと申し反て故人の徳を傷くるが如きことありて世間への申譯も無之候間左に小生が古き日記を繰返し目につきたることども少しく申上げ、ともに故人の徳風を偲ひ度と存居候

思て出草

去る四十一年の十月であつた、時雨うば降る淋しき秋の夕、亡き小原兄と大手町本校病理教室附屬ある君が當時の研究室で暫し語つたことがある、此日は丁度病牀解剖のあつた日で相憎村上先生不在の爲君が執刀の下であされたのであつた、解剖の終つたのは早や黄昏近き時で窓打つ雨の音は聽へれど風さへ添ふて一しほの淋しさを感したのである、當時君は既に病寤に襲はれて一回血を見られた後聞いて居つたので殊に目前君の青白き顔を見稍やつれられたる姿を見ては痛ましきの増して親しく見舞の言葉を述べたのであるが、君には平然として微笑を湛ぬが「ナニニ大したこともないです」と軽く打消し「然し君のアルブミスワリーは此頃どうです」と反問せられた、こは余が嘗て窒扶斯を病んで後久しく腎臓炎に悩んで居つたのを知つて居られた爲め尋られたのであつた
余は尙時々出るので不安の念にかられては居るが自覺症か、いので漸々平氣にあり今では殆んど忘れて居るご答へたら、君はサモ吾意を得たりと云ふ面持ちで「甚痛の無い疾病を恐れて居つては人間一生何事も出来いと思ふ、吾々は誤つて素人よりは多くの醫學的思想を持つて居るが爲め僅の事にもビク／＼遂に大切の修養時代を煩悶に暮す様ふことになり易いから只自然に任せて出来得る限りのことをなすし安心するより外はないでしよ」と、而も當時君の眼は希望の光に輝き唇のほほり深き決心のあらはれて侵すべからざるの色を見わたるのであつた
嗚呼君が此言此句!!! 聽く余は實に悲愴の感に打たれたが又實に復活の光

(漫録)

明を認めたのである、君は眞に偉大なる宗教家であつた、口に宗教を説き、宗家であつた、君が其身に病あるを忘れて致々研究に餘念のあつたのは確に君一流の安心立命であつた爲であらふ、世には學者らしからざる學者の多いのに君は實に學者らしき學者であつた
泣かず、笑はず、喜ばず、誇らず、倭はず、傍目もふらざりしは君の特色であつた

蓋し君が此崇高なる人格は實に君が不動の信念によつて高められたものと云へ其根底は彼の君一流の哲理によりて深く／＼固められたものであることは堅く信じて疑はぬ處である、君今や北邙一片の烟と化し其温容は未來永劫見ることとは出来ないが、君が喝破せる一片の警句は尙期々として余が耳朶を打つのである

君が不拔の精神には無情の病魔も涙をふるつて其壽を奪つたのであらふ、心に生れて心に歸つた君を深く追慕するのである、吁
二月十四日夜 櫻木病院にて 申村欣一 耶

註、小原君逝去に際しては諸方面より御遺族へ宛幾十通の吊辭か參つたのであるが、いづれも衷心より君を惜しみ君を哀んだもので誠に捨て難いもののみである、今そのうちより左の三通を掲げ特に其一班を示さうと思ふが固より他意あるにあらざるは勿論である

御令弟芳雄様御逝去の御悲報を拜誦し實に驚愕仕候御渾家御一統様には嘸御愁傷被入候御事と奉恐察候誠に斯道に忠實精勵前途有爲の御令弟を喪ひ候は單に一人としてのみに無之本邦醫界の爲に痛惜に堪はざる次第に御座候去ぶが御令弟の御病氣は元來斯道御熱誠の餘に發生致候ものにて武士が戦場の露と消えしと同一轍其今日あるは既に業に御令弟の期悟せられ

し處に候昨春東京にて拜姿の節にも「余は唯此事業に斃れんのみ」と明言相成居候へば心ず御令弟にも御不満無之かるべく小生等も亦女々數慟哭せざる積りに御座候尙貴下始め御尊家御一統様にも能く御令弟の意を諒せられ今日まで謂はゞ不生産的研究の爲に幾多の時を學費を御支給相成り御令弟が意の儘に被遊候事に候へば此際御愁傷は無論の事に候へ共何卒程よく御諄らめ御追福專一に奉祈入候

何れ同窓等相謀り御英靈を慰するに足るの方法を講ずる考に御座候へ共茲に不取敢御吊詞申述度如斯に御座候謹言 一月十六日 かつて金澤醫學専科病理教室にて室を同ふせる友 渡 孚 貞 拜

拜啓陳者御賢弟芳雄様御儀御病氣の處御養生不被爲御叶本月六日御逝去被成候趣御通報に接し誠に驚入申候御病中の事も一向承知不致候爲め御見舞狀も差上不申誠に残念此事に御座候御家族皆々様の御愁傷如何計の御事かご奉察上候就ては別紙小爲替券を以て香華料御送り申上候間乍憚御購求の上御佛前へ御供へ被下度願上候先は右御吊詞申上度如此に御座候勿々不備 一月十八日 村上庄太

向々御賢弟の儀に關し記念として永遠の御名を残し度爲め當地有名者ご其方法等協議中に御座候間御承知置被下度候 拜啓陳者御令弟様蓋臘來御不例にて御加療中醫藥効なく遂に去る六日御死去の由實に驚愕仕候貴下初御親戚御一同の落膽愁傷如何計と深く同情に堪へ不申候早速御吊詞可申上筈に有之候處彼是取紛れ誠に失禮仕候先は御悔迄早々如此御座候 一月廿日 高安右人

* * * * * (高伊三郎氏宛)

久しく御無沙汰いたしました、貴兄が御轉任さき、直に寸緒上げんと思ひ、遂に貪乏暇なしの喩に漏れず今日に及んだ。

今朝十二月二日附の御書面懐しく拜讀いたした、御手紙の趣にては頗る草深き土地劇寒の處加ふるに言語不通の九州奴嘩かし無聊のこと、推察し奉る而もまあ御健全の由何よりでござすよ、身体だけはに大切にございませ

兄は現役ふれば内地勤務よりも駐在軍附の方向にかつて面白きこともあるべければ雪の中水の上または熱灼の天地に往來さることもお体のつゞかぬが、健康のゆるす程度に於て愉快至極と存じ上く、只飛躍を企て、遂に其の御縁ふかりし迂生ひたすら羨望の至りに(中略)

貴兄の御熱心によつて出来た法友會も近來は種々の都合にて怠り勝たなつておりますがまだ念佛の事安心のいわれふど少しも知らずかつた中島及生は貴兄の御引き合せによりて多少ふりとも日頃の事物に接し安心を得られ悟りのつく様にかられたのは兄並に梅原師のお蔭と感謝して居ります、一月の中旬ふりしが雪のちらほらと飛ぶ某日兄中島余の三人が日曜の午後を幸ひ打揃ふて八坂鶴林寺に佐藤軍醫を訪ひ不在更に本院に松山軍醫をねこふひは是れ亦留守、やむなく空足を返へして兄が自宅の二階に火鉢を取り圍んだ時の話が修養とか他力さか申すこと、梅原師のお名も此時紹介される、そこで有志相集つて教をきかうと云ふにふつたのだ、あゝ實に難しい、私共のおさげある佛陀に近づくを得た機會は實に、斯の如きの時であつた、時折思出し又中島と相語るのとき此の語が出る、数日前久しぶりて(お互に多忙あるまゝ……中島は出勤時間外に閑暇はあるが勉強もかし奔走もふしむるので、生は少しかり助手時代よりは多忙さふつた、相逢ふことも月に二三回位のもので、時によると一回位のこともある、用事があれば電話で話するのだから)晚餐を共にし一夜を物語つた、が中島も近來感謝の念佛しみると心興にひびくこ申し居られました(中略)

私もたゞ多忙せぬ、今日にて今學期の講義を終り多少閑散さふつたまゝ、

先づ筆を走らした、尙書籍ふんど御希望のものもありましたから云ひ給へ、兄が留守宅へ御届致しますから、まづこゝにて

三十八年十二月十四日午前 ストーブを眞赤さおして

北滿洲高大兄

よし 雄

二 (中島誠氏宛)

先達は御手紙有難う、景氣頗る長く門市市を爲す盛況ふそ、それで結構です、その分で益著實に貴君の腕前を地方人士の信用にかへ給へ、毎日大さき願して自宅診療やら往診でかけまわるやら、田舎での鳥さき里にさぐかし得意満面ふらん、羨望に堪はず、然し其の得意をして一段の進境をこそ望まじけれ、日新の醫學に後れさらんこそ是れ

大ぶロヤカシやアブラをシボツタから、今度は小生の得意(?)を述べん、君と別れてもう八月にもある、三日相違はされば將に何にさやらの古語もあれば、さて小生の愚痴はいつにかわらぬ勉強が出来ぬことあり、いつまでも馬鹿ふことあり、それなら勉強したらよさそうものだが、ふか〜に無形のこと、自分ひとりのことはちやんそ出来ぬものだ、また金澤を去つて東京とか京都とかの大家連のところへ行つてもうらはかわるまい、唯ふ〜くこでも上手にふる位だらう、卒業してもう三年、いつまでもそう〜つまらぬまねをして、いゝ年にあつても馬鹿面(當人は矢張り人かみの面ありと自覚せりと見ゆ)して狂人の様にわけもわからぬ染物屋や經師屋のやうふ〜くこしても居られまい、さうで明年あたりは○○○○○○○○○○、こゝで一つ相談だが君の醫院へ代診が藥局生に行くから雇つて呉れるか、否、御雇被下度懇願の至り、俸給はいらぬ、唯飯さへ食はしてくれたい、小生は山紫水明の信州淺間山麓に一二年住みたい、身体と精神とをこしらへたいので、もし精神も身体も望みふいと生まれれば、まづそれまで君の處を一生の奉公口と後生大事に忠勤を励める、然し復活した時は海を渡らうかと考へる、海さ云つて遠くはふい、せめてが韓國位さ、斯様考た

から何分よろしく御願ひ申します、代診として遙々信州くだりまで出かける時期は○○○○○○○○、小生が不得意さ加減お笑察あれ

學校には別に變りかふい、佐々木先生孜孜やつて居らるゝ、そうだ、先生が在歐中の著述今月の醫事新聞に譯載されたから御覽ふらん、また歸朝後の

研究一、在獨のもの(慢性下痢と牛乳、犬の胃液分泌と肉體衰弱)は數日中に發行すべき十全會雜誌の原書欄を飾つて居る、旗下には三木老將林大將以下齋藤丹羽の面々をひき、猶今度數名の若武者を加へ益々歩武を進めらるゝ、山崎先生ますます元氣旺盛、燕尾服に絹帽をそれに勳五等の先生は先達の天長節に拜見、宮田先生相變らずたけ高し、先達職員談話會で高山先生と身長くらべをしたら、高山先生の方が二寸程も高かつた、深美細田村山の勇將に加ふるに片や田中芦澤七三五横山の群雄林の如くそれに雲の如く集れる副手連、ピールの吸引療法も骨髓管内注射も中々盛んだ

小川先生さかく健康勝れ給はず、然し近頃はボツ〜出勤せらるゝ由、八田兄健康回復もその如き怪氣焰、高安先生明年卒業生學生發起にて在職廿年祝賀會を舉行する筈、其方法は今度の雜誌廣告にあり、貴君も御賛成を願ふ、岡本兄開業後ますます景氣よろしく、島出兄いまだ歸へられず關猪木は變らず得意ださ、井上只馬關要塞に行けり朝倉から先達音信があつた、韓國から、月原君まだ天津に在り、上忠北海のはてにかしこまり居るいさ神妙あり、先はこゝにて擲筆、末筆から奥様におよろしく、お目出度きここの由、御攝生第一に 僕の頼みは是非お頼み申すよ

四十年十一月十七日(日曜)午後雨天、今ては一人も朋友はなし遊びに行く處もふいし、しやうがふしに書見でもやつて居ると眠くふる……………

三 (全氏宛)

信州人、中島、講師殿、さやかましい文句を並べた葉書、只今落手(十六日午後一時)……然し日附がふいので……………

信州は天氣がいゝそうて結構だ

新博士速水先生が御歸省にふられたそうて、佐久間郡は驚天動地のさわぎをやつたらうな、先生に接した君なども餘程歐洲風に咲かれたさ見へて「一度行いて見たいものださ」と云ふやうにふつたり、洋行したつてさう大したことはないさ、それよりも温かく炬燵にてもあつたまつて居つた方が、よほどました、言語不通に加ふるに素養がない、つまらない、一つ二つの Thema を金の力で貰ふて、やつとドクトル、ドクトル論文位の材料は金澤へ洋行し給へ、何時でもあるよ、それよりも日本に居つても、あつちへ行つてもだが、やるから大きな價值ある仕事にかゝるのが、ほら、いよ……しかし金がたまつたら君も行つて来たまへ、すゝめもしないが不賛成も唱へない、實地家などはすぐ金がたまるから五六年働けば二年位の留學費はわけはないさ、ドクトルを貰ふて來給へ、新しい空氣を吸ふて來るだけてもよいよ七十五日長命をなすから、〇〇〇〇〇とせよ、こゝろに大に動議ありだ、君は僕よりも棺桶に近よつて居る(君はもう余程の年と思ふ、なぜから五六年前さる處の旅館で三十歳さ宿帳をつけたことを記憶して居る、それからするともう卅五六だらうな)且頭腦が實地家的だ、そう云ふ御仁がわざ／＼西比利亞鐵道に十六日間も乗りつゞけておまけに譯のわかりそうもふい空論を拜聽して來るよりも、それだけの金が出來たら、乃公を留學生に推擧したまへ、その方が一層の功德だ、僕も中島診療院の留學生さあつてキツト「アルバイテン」して來るよ、明治四十一年は大に祝福すべき年だ、新年早々斯様な動議を提出することゝ出來るさば、——昨年暮へいふ問題を出したのだ、賛成者があかつた——僕の郷里で——Grundmedizinだからどうも承知か六ヶ敷、こゝろで談判破裂て僕は獨立さ、だから當時心細くあつて君へ居候の無心を頼した處、こゝても見ん事に茶にされたこれは過去、年新たあるさ共に大に活動しやう、僕も其内にどうやらこゝろやら人間にあらうと streben して居るよ、運は寝て待てと言ふから、夜は

十時から朝は八時半迄炬燵の中で考へをめぐらして居るよ

四十一年一月十六日

金澤病理室にて

四 (全氏宛)

いつでも月のはじめに出すことにしてある月一回通信、今月は一日／＼とのびていよ今日廿九日さなつた、これでも今年は閏月だから今日もまだきさうきの内です

此月程忙がしく無我無中ありしはあつた、ふんだかわからずに済んでしまつた、月の十日迄は試験で學生を苦しめ自分も苦勞をした、上田先生に似て來た譯ではないが Lampe のもつて試験をやつたし御説教も大ぶやつた、……僕の説教もやゝ餘り有り難くもないが、單に病理總論のみの Examen にはさう Diagnostic, Pharmacologie, Allg. Chirurgie, Physiologie Anatomie, Histologie, Zoologie. にもつて回つた、Blutplasma の Spezisches Gewicht はさうさう、Haemoglobingehalt, Resorption, Verdauung, Gehirn の Anatomie, の Brust の大なる Arten 動物學上の分類も入て、こんなことは君等の様も御醫者様にはおいらでもさうさうも、廿世紀の世界的醫師には必要あり、されど今後の醫學生は益々勉強しなくては僕の學科は Pass できさうな

月の中頃は防疫、天然痘てこた／＼

先月末君から頼まれた「チクタイ」いまだに送らぬ、大に失敬したり、然し實はどんなのがよいかさうさうと思ひつゝ例の月一回通信が後れたものだから自然延ばしたのさ、君は昔から不注意さ方の人間だが、今度だつてわざ／＼金澤まで云ふてよこすから、なんさか注文がありそうさもの十全會入會一件は困難したり、昨年末ふればまだ何さか致すべく君の方へも云ふてやつたのだつたが、全体次の規則がある、

「滿三ヶ年會費未納のものは除名す」、君は卒業後三ヶ年即ち昨年八月迄にて十全會は九月にて年度かわりなり、除名にふるわけさ、だから此規則に

てらすき明に今年度即ち四十年九月以後にまつて入會しやうと云ふことは出来ぬ、暫く副手はして居つたは居つたが、副手は別に十全會費と云ふものを納めぬ、僕等は月々納めて居る——これによつて一時は君の入會許可が六ヶ敷くまつた、然し數回の交渉の結果とうとう旨くやつて四十年九月方五ヶ年と云ふことにしたのさ、君からの注文には昨年三月以後さあつたが、そうするに三十九年九月からの年度にしなければならぬので、雜誌は二冊かけるわけだが、別につゞきものもふいから今年度からさとしておいた、(中畧)

迂生も洋行の相談に再び失敗した、……中島醫院方の留學生としてもさうだが、○○○問題は何遍頼みあげてもおんさも相手にまつてくれぬ、親しかりし君にすらこゝろ仕向けられては肚胸も大抵はきまつた、益々天地間に神か佛をたのみたよつて、このさきをどうかして暮らさねばならぬが、今年の夏あたりから少し發展しやうと思ふ、Chemie と Bacteriologie を少しやりた、いから

これがすんだら何か Fach のものをきめて研究する、か、一生を研究に過す、どうも Arzt にまつた、ららてはやらすやうか Doktor にはむづかしいから、まあ世の中のすたりものさ

上思より過日通信あり、電信柱もよく凍結してしまわぬやうか、電気を通ずるからふりさ、而も先生○○○問題があるさうか、養子ふりさ、忠の○○は餘程變物ならねば駄目也、三服より時々通信あり氣煩高し、韓國下村も後ればせに昇進したやうか、朝倉も韓國を轉して居る、暴亂征伐でさわざださうな、關啓天神様のやうか、Bart をはやして益々親父振つて來たと云ふ、猪木は相變らず島に目玉をつまかれおるとさ、山本幹雄いつも自慢、さころで君は如何、天氣はよいか、寒い風に鼻涕でも出して自轉車で喜んで居るか、赤ん坊は出來たか、林篤もいよく製造したりさ云ふ、六七ヶ月あるべし、君は去年來彌々健康にまつて例の腸加答兒も起

さす、たれやらのやうに鼻汁は昔より出したことさ、昔から君とは何遍も絶交したか今度も絶交しやうか、其理由は(一)一月一回通信も僕の忙しさでは今後六ヶしいかも知れぬ、(二)君に頼んだ事をちつともやつてくれぬから、○○○の小包便も古くからの事さ、洋行問題もだめだし、居候も許可にふらぬ、依て昨年三月から滿一ヶ年で絶交しやうか、どうだ君の方はまだ種痘は済まぬいだらう、痘苗をいふれば僕のさころに九十人分餘分があるから送つてやらうか、當地方は一体に終つてやりどころかぬ始末、いるから電報で云ふてよこし給へ

五 (全氏宛)

二十六日田の御手紙只今拜見、御尋に預りました條々次に(中畧)、——本年五月の十全會講話會所演の上田教授の Oponinlehre は唯其一般(白血球の喰菌現象よりオプソニン學說に及ぶ)、次に櫻木病院にての實見二例、一は Sysois parastaria 他は Focken 後の耳後の Abscess 然し Oponin-index 等も示されず全く學問上より見ての精細なる報告ではなかくて實驗的症例に就ての報告であつた、オプソニン學說に就ては英語(英米)のものに參考すべき雜誌書籍あり、獨逸語の書にも細菌學中央雜誌などにもある様さ、獨逸書にて Monographie として如何にや、御入用されば Literatur を調べてもよいが

救急法の參考書は日本書にもあり獨逸書にもいくつもある様さ、讀んだ事はふけれど獨逸の Katalog について Populäre Medizin, Chirulspnaxis の部を見られ、昨年末長逝せられら獨逸軍陣外科の泰平……グンブレント氏? の著は評判高き様さ、これは日本にも譯されおる筈、……今寓には Katalog をさゆへ學校へ行かればわからぬ

(中畧)——輕井澤への避暑さのおすいめ、千萬かたどけふし、されど一寸暇も得ざる迂生はとて閑日月をつくるの餘裕と襟懷なきを奈何せん、

(漫錄)

これにて用事は終れり

僕はまだ生きて居る、動く、話す、やすむ、れる、人様のすることは大抵はしてゐる、矢張生きてゐるし生命もあるのだふ、氣がつく、脈々の血潮が循つて居るうちは *inleben* あり、僕は寸暇をも *inleben* して居る、敢て生きたいためふらず生き居るが故に——まづ——此邊としておく

四十一年七月廿八日夜十二時

六 (全氏宛)

秋はだん／＼深くあつて行く、信州の秋景や如何に金澤では卯辰山大乗寺山が人間どもの狂ふ舞臺とあつて居る、君の御機嫌は如何併せて令聞とお子さんとは、僕は八月中旬から病氣で半死半生の姿だ、然しこの二週間は少し快方だが、あゝ僕も人生の秋が冬になつたのだらう、近く散りゆくべき運命り否？ 四十一年十月十八日、日曜朝

註、「八月中旬から病氣」とは丁度八月十二日夕方第一回咯血をせられたことである、

七 (全氏宛)

今日は廿五日の日曜日、曇りで風はあるが日輪は折々顔を出しおさるし、小春日和の暖い日だ、午後一時から天徳院で故小川恩師の追悼會(門下生發起の)がある、御参り申すべきのだが、昨朝からまた少し工合が悪るので、行つて行かれぬことは毫もか、あとの影響を危惧して失禮することとした、そして此手紙を仰臥位のまゝ書きなぐる、されば此手紙は餘程有難いことから左様心得よ

此夏病氣だつたさうふ、僕はどうも君が輕からぬ病にかゝつて居ると様に始終思はれてしかたがなかつた、無線電信でもおからうが所謂感應だつたか、愈々事實であつたか、然し御全癒とは何より結構至極、Sputum の性は變たか、Lungengedel の Eiar だつて何時も吾人の眼に映するさは限らぬ、信州は本場だけに、さんあのかも知れんよ、Lungen の Haemorrh-

gischer Infarkt の疑はなう、ふ、然しこれの原因である Herzfehler はおいだらう、又 Herzfehler Zellen はないが、モウ一つ後鼻腔、咽頭、舌根部よりの出血如何は勿論しらべたらう、此處から出ても随分粘液密混したものがありますよ、最も君のは褐色痰となればこれらでもかゝいだらう、こゝ切角養生おさいまし

* * * * *

こゝでさて何を書かうやと一思案……その内に華膏の境に入ちやつた、一時間半後、ぼかあーと醒めた鈍頭はさしも烈しかった頭痛少しくやむ、いざ書かふん

候は正に燈火親むべきの節である、われ等が讀むべきの書籍雜誌はいくらも山積されてある、片端から平けて行きたいとは心が早まつが、すぐ其後から讀では身体にわるいこの警鐘で、さうだと讀むのをやめる、……目下の自分はこんふ憐れな有様さ、こゝ云ふ問題をこゝして調べればしつ／＼の成績に到達すべしとの考案はいくらも順に浮いて來るけれど、……あゝだめだ

貴公は同文館の大辭書で御勉強おさるさうだが、ごいらいこや、こんふ本は突差の場合にしらべるには都合よからうか、何もかもあるから、然しわれ／＼が参考するだけの價值は至極少いさ考へる、一寸臨床醫典の大部のものやうだ、どうせこしらへるから、あせもつと詳しいものにしなかつたか、惜しいと思ふ

貴公がこんふ本で勉強おさるよりも今こゝで一二の本をわすゝめする、或はもう御覽かもわからんか

Lentze 氏内科疾患類症鑑別上下二卷、最新版のもの
Salini 氏診断學、最新版

内科を標榜おさる貴公殿の醫局には是非入用なり
進歩した臨床細菌學を見んとすれば Kolie, Hetsch 両氏の傳染病論を讀む

ガラスにツ、カレンタ目玉の創も治ることだらう、お醫者も申す者旅行廣告に悪き僻あり、出發のときは内々にして歸院の際は院主(長)學會列席の爲め上京中の處本日歸院、甚しきは醫術研究のため上京中云々を以てす、あるほど開業術も難い、處へ○○○○○先生の廣告如何。

Tuberkulöse Ascites und Femur の Ein Fall 非常に interessant なることあるべし、何故に都大路は本郷高臺梅鉢御紋の加賀權御屋敷跡は法科大學教室第卅何番講堂に於て天下の學者を相手に蘇張の辨を振はざりしや、伊勢の森正道博士名古屋の北川乙治郎博士おんとの手合、それ幾何のこともある、實質なき内容乏しき雜然たる頭腦、比々みふ然りや。

Femur の結核性炎は單發、原發、ありしや、Knie u. Hütfgelenk にも些の關係ある、而も身体他部に bemerkbar の T. B. Herd を持つて骨に發生せしや、骨の何れの部 Komplikationschicht の Knochenmarkhöhle かと、而して Diaphyse 5 Epiphyse 6 6 6 Alter は如何 Verlaufs 6 Op-erativer Befund 6 6 6

朝から晩まで御勉強の御様子、ほろ／＼感心お仕りて候、開業醫先生には珍しいお方と賞めて遣さん、時間おきときに際して零碎な數分時をも惜みて勉強に努むる方が頭へも餘計に必み込むことせやう

新刊の内外諸雜誌に就て絶えず新智識を補給することは必要と存する、然し雜誌に就て勉強すると迄熱心に精力を費すの要は少くさいと考へる、雜誌はたゞ雜誌たるべし、宜しく通覽し置くべし(精讀は勿論必要)而して他日用にのぞんで記憶にさひ乃至は其雜誌を再び翻かば足りさん、十數、數十の週又は月刊の雜誌につきて悉くこれを讀まんとは無理なことあり、讀むべき而して益多きは本あり、Lehrbuch にも Handbuch あり、Monographie たるものまで吾人に教ふるに親切を以てす、軌近の醫學は化學的方面に著しき歩武を示せり、診療的方面にも Physiologische Chemie の Praktisch 1111、れ、まては昨夜、深更襪上に坐して机に倚りながら書いた

もの、かたへに臥せる Pigeon 忽ち目きめて其不可ふるをとくや屢々なり、而して遂にこゝに至りて彼のためいやおふしに毛布につまられた、曉方から夜來の雨が雪を變つたそ、今朝は近來にふる寒さ、また倚坐するに目玉を頂戴するし、自分も起きる元氣もふいからずかきやると、亂筆益亂るや、次第 Praktische Anwendung の範圍も廣大に、Eiweiss Chemie は寸刻を趁ふて新面目に向ふ、しつ／＼これ、Bakteriologisch の Praktische Anwendung に到りては甚た大なる効果を擧げつゝあり、Physiologisch. Pathologisch の Chemie に於ても改新の處多々

而して病理學の面目漸く改まらんとす、われ治療的醫學、醫術は知らざるも少くもこの(上記)の方面に於て書籍(雜誌)を繕くを怠らざれば所謂流行には後れをとるまじや、大ぶさんだわからぬことを田舎者が申し立てたね

先達はわざ／＼結構ある品澤山御惠與に預り厚く御禮申し上げます、私の病氣はいまでもその神経病をかりふか／＼治り難いそ、のでか、春の日にうら／＼か、空合を病憐から眺めつゝ、病境安住に楽しんで居ります、小生の病況につきては東京にて岡本學兄よりおき、の事と思ひますから、また自分ながら自分の病氣のことを知らず、藥がなにやらも知りませぬから、こゝには省きます、良徴が惡徴やも存ませぬ、この數旬、今後の數月、數年(?)の病臥によつて天は吾に靜養の機を與へ玉ひされさよること居る

先日あげた 日記を書いた頃は、あれが發病以來最初の手紙で、ネガキにか／＼骨が折れた、右肩部に神経痛があるのさ長く關節を休止したのと、三時間もかゝつて面も氣息奄々汗みどろになつて書いた頗るご利益のある手紙だ、四十二年四月七日

十一 (全氏宛)

初夏の節、御機嫌如何、何か面白きこともありませんが、僕は二月來の病

氣が案外長引いて、「アロイリチス」の跡始末のため四月末迄病褥にありました、五月初から外出運動、此頃はしきりに遊びまわつて居ります、此夏には君の方へ御邪魔に行きたいがいゝてすか、

四十二年六月三日夜

金澤にて

十二 (沼津靜浦の富士繪ハカキ眞館修平氏宛)

貴墨拜讀、四年級を御及第遊ばされ八田殿の下にて御研學の由かかれての御病氣はその後如何に候や、秋季の試業には優良の成績にて御卒業の程祈上候、迂生饑病後の疲身を提して熱蘭而も黄塵面を向くべからざる大路小路の都に入り焦熱地獄に陥らる無學の擧を敢てし諸君の御聖慮を蒙り候は甚た相濟まぬ事と存居候、幸に地獄中に氣息を通はせ其日々を送居候が容體に別狀無之候間御放念被成下度乍序藤井山田殿八田長兄足立學兄其他諸君へよろしく御鶴聲願上候

病理教室に遊び旁々通學致居候、金澤の教室さは模様かわり且つ全く同づなつとめ候故面白く候教室には大學卒業の助手副手十五六名其外の研究生選科生廿名程有之候、八月一日より助手福士學士と全行山梨縣へ出張の豫定に候

四十二年七月廿五日

於東京

十三 (諏訪湖より上諏訪を望む繪ハカキ、中島誠氏宛)

確氷の紅葉に雪が撒つたこと云々信山に濟生の術さらせ給ふ兄、御近況御伺申上候、Praktiker—Landarzt として Interessant のことも御經驗に加へて意義ある人生をたごらるること誠に羨望に堪はず候、御令聞御愛兒御機嫌如何に候や、東京は菊見と紅葉狩りとに萬都の士女狂奔致居候、眞に浮世に御座候、高岡山樓(八田曰く高伊三郎氏あり)は今月初より順天堂病院外科に Assistant として非常なる勉學につきめられ候、氏は相變らずの高的 Manikaischdepressiv のことを吹き居り候、されど例の修養には怠りなく時々求道學舎に常觀師の信念をたゞく模様に候、在軍も醫學校の山

本幹雄氏は獨尊的に勉學し、且つ自吹致し居り候、次に小生は未だ存命にて厄介至極に思ひ居り候、何事も大命のまゝとは覺悟致候も、其後修養も鈍り候爲にや時折りは馬鹿考へも起り候、徒らに市塵にまみれつゝ西に東に動き居り候こと何等の意義あるべしとも覺えず誠に心淋しく候、東都の醫學界は Kage の研究に集注の模様候、然し病原体などはまだほど遠き事に候以上、四十二年十月廿七日夕、晴天、伊藤公暗殺の報ありし翌日、

十四 (全氏宛)

神田區五軒町一六伊勢方

都の空は降りみみならずの梅雨深うたれこめた天候、御地も定めし農蠶どきの際雨期でござんしやう、さて其後は一向に生きたまふにござんとも音沙汰もなく、東京の Tage Buch に黒くも出ない所から察するに、矢張相變らず動いて居ることと思ふ、動けるうちは動き玉へ、鳥醫學博士のやうに入院治療中に學位を頂戴して而も數箇月の後には Thelohans の爲に、迷士への土産と博士號をもつて行きかざる方もあるが、餘計に感服も出来まい、高木兼寛男爵はどこへ行つても息子の自慢、由來名門の子弟は馬鹿であるが我が子に限つては然ることふしと云ふ、其次男は歸朝早々博士號を貰ふに、あつたしそれに百合子嬢とお目出たいのがあつた、兄貴はいたゞまらずに洋行さ、斯様な博士さんともござるが、わしらは學士さん……おめいさまは學士さまよ、貰へずさ血の氣のふい顔(大學で大學出身者以外のもは一体に血の氣がふい、顔筋がゆるんで、金は委縮して居る、自分は常々觀察して居るのだ)してすくんでござるわい、先達も雜誌屋が貴殿の肩書は學士とすべきやと云ふ、これは眞平だ、無位無冠として呉れと頼んだ位、おめい様は兩三年このかたの地盤で達者に動きかざるのだから、職業に面白味もあるだらう、(中略)

放浪生活の僕は問はれ矢張依然として涙人々らしてある、先月末から一寸健康を失して以來(Influenza?)一向に恢復に及ばない、Fieberbewegung

もあれば *Apetitreminderung*、下痢も時々ある、……これは自分の持病あり、毎年三月六月にふるゝ腹痛と下痢におよむ、例のクソツボリも其一分症ありけり、此頃これが少しくよかつてどうやら食欲も出たと思へば大變だ、右腋窩に鴨卵大の膿瘍が出来てもう一週間も苦んで居る、こんふわけで昔とかわつて頗る呑氣か馬鹿者になつたのだが、近時再び神經質さかつた、体重は減する、もう愈々おしまいにかううと云ふ状態、身体のために學校へは行かぬし、もう一月も東京の町へ行かぬ、こゝは菓鴨の片田舎、お坊さまに因縁がある、眞宗大學もあるし精神界の發行所、無我山房は僕のすぐ裏で原千廣宣と申さるゝ昔浩々洞で清澤先生につかへた方が住んでござる、精神界の配達ふんか、大學の學生が制帽制服で箱車をひきながらして居ます、七八年前世人を驚かした伊藤證信さんや河上法學士の無我生活をした大日堂と云ふも菓鴨にある、自分は縁あつて初めて宗教の信仰に入り、いさゝか、かりとも信仰と喜びとにあることが出来たば此眞宗である、非常に愉快に世を觀察し復雜な周圍の事情以上に超越して居ることの出来るのは宗教のおかげと思ふが、自分と眞宗とはかゝる不思議の縁がござるから自分が命を終る處も此地だと覺悟に及んだ

毎日、こゝろんとして倦怠か五體のおきばしよに困つて居る、然し食はねばならぬから、前から關係の某通俗雜誌記者(八田曰く科學世界あり)の役目をつとめる、原稿締切までにとあせつても順は鈍るし昨今は腕が動きかれるので豫定通りに行かぬ、それでもどうやら四五日毎夜二三時間の睡眠でかたつた、其後は外國書の翻譯をして居る、藝は身をたすくさむべなりけり、獨學でこつつけた獨逸語もちつさは此際に役にたちそうあり、然し *Deutsch* のみならず佛英語の處も多く甚しきは波蘭語で書いた處もある、毎日せつせきやつてもいくらか書けぬ、この大部のものが終れば、もう次の頗る大きな仕事がかけて居る、今のも近く日本で出版されるが次のは餘程面白いもので今年末までには世の中に出すことが出来やう、

婦人美容論と云ふのだ、執筆者は某々博士等であるが實は菓鴨の一狂漢が苦心と知れ、よくしたものでもう昔修めた臨床醫學は勿論、幾年大手の森で鴉と友達になつて、事務の先生から朝八時夕四時ときめて昇降しおければいけぬ、汝の如くまだ學校の門が開いたばつかりの時にもう來たり日が暮れてから歸るやうではこまるさ、度々の注意に何の位病理とか申すものに腐心したか、醫學に對しては中性の頭腦さあつたこれではだん／＼に素人にかりますであらう

ところでおめい様にお願がござる、こんふことをおめい様の耳に入れるのは甚だ申譯もふく、お願の出来る義理でもないが、金を少し貸して呉れさ云ふことだ、もういつ棺に納まるかわからぬ自分に貸金ふんかするのは頗る危険であるが、今の自分でに慥に返済に及ぶべく、然し相等の利子を附してですが、唯抵當と保證人がないのだ、依て抵當は僕の開業免狀とし、保證人はあかだ如來とでもするが、高は五拾圓位でもよいし參拾圓でも難有いが百圓から大に結構、此金で敢て *Home* の生活をしやうの何にを買はうの或は美人に傾注しやうのさ云ふ氣は更でない、四月初以來自活せればからぬこゝにかつて郷里さは殆んど絶交同様(但し當方よりふり)少しも補助を仰がない、からこんふこゝにかつたが、どうにかあるだらうとの呑氣な考はいつまでたつてもどうにもあらぬ、依て以て廣く東京で借金も出来ふいでやむことを得ず遙々信州くんだりまでお願に及ぶ所以である、翼くは僕の裏心を賢察あつて……大へん尊敬するれ、慰勞の情を垂れ給はんことを、借金の證書は直ぐ送る、貸してくれるなら一日も早い方が御利益が多い、何分にもお頼み申します、これはほんとは、やつ、急に此際絶交ふんかしてはいけぬ、さよなら

四十三年六月廿七日

東京府下菓鴨町二丁目三十五番地

芳 雄

註、昨春三四月の候より當地知人へ全く音信不通ありしより察すれば飽

の知友諸氏へも同様或は音信不通であつたかも知れぬ、して見れば此手紙は中島君宛最後のものであるのみならず或は君が知人への絶筆であつたらふと想はるゝ、嗚呼此の絶筆、余は各位と共に亡き君が最後の餘音として切に偲び度い念ふ

* * * * *

註、以上の如く余は出來得る丈の範圍に於て蒐集し得た處を案配し、之を掲ぐるの喜を得たが、其後令兄眞一郎氏より來れる書中尙參照すべき處尠からざるを覺ゆるまゝ、茲に補遺として之を追加し更に余が感想の一片を書して此稿を終らふと思ふのである、讀者幸に愚衷のある處を諒せられんことを祈る

* * * * *

拜啓(自署)就者十全會雜誌へ小生の手紙全部掲載差支ふかこの御意實に難有次第に候小生の淺學ある自己の意志の十分の一をも表はすを得ず且つ急き候こゝして文學、熟語等も誤謬の個處尠からざるべく世人の笑を求むることもやと只答案し申候間宜敷御願上候次に書籍の義亡弟の御交誼を辱ふせし皆様方へ記念として差上げるか或は金澤醫專校へ寄附致さんか、と彼此を思考もし知人と相談も致し候へども御承知の如き病氣故或は却て御迷惑の義かとも存じ昨日全部本屋へ賣却仕候間左様不惡御思召被成下度願上候(下略) 二月七日 東京にて 眞一郎

謹啓一昨夜亡弟の大學病理教室にての品物片附につき御禮旁として長興又郎先生を私宅に訪問仕候處其際金澤の八田氏より芳雄之東京大學にてあせし仕事に付照會まいり本日回答致し序に何れへ吊状を出ば宜敷やと照會致候旨申され候(實は弟の死亡通知も東京はどふた様より御厚誼を蒙り居候哉不明の爲更に通知致さず今度上京に付若草に大感謝重懷を御尋れ致し大

(漫 錄)

學の病理の教室は山極博士ふれど全先生は目下國府津へ轉地療養に參り居られ芳雄の死去を知らぬ方却て宜しからん長興助教に面會すべしと申され訪問致候次第に候)尙亡弟が四十二年八月甲州へ片山病の研究に醫學士福士助手と二人にてまいり候得共た福士さんより大學の方へ報告無之或は二三年續いて參らざれば報告するの價値かきやと御話有之候、嘗て亡弟が小生等に甲州へ片山病原研究にまいり歸京後大學にて取調べ略ぼ福士助手へ差出し候得共福士さんは忙はしき故か、于今大學へ報告されぬ様にて残念だなど申候こゝ有之候、長興先生方未報告云々と拜承致し亡弟が熱血を注いで研究と取調へ候事の發表せられずか實に小生も此上かく遺憾に存候、而して福士氏は昨年洋行の由、

又標本も有之候はん、必ず面白きものもあらんに付、金澤にてのものは大學へ大學にてのものは金澤醫專校へ寄附致し候て如何との御話し有之候、其意に従ひ昨日片附に行きし際金澤よりのもの全部大學病理教室へ寄贈仕候、就ては大學にてのものは金澤醫專校へ御差上げ候て如何のものに御座候哉無用のものを差上げても如何か、と存じ一應御意見承り度此段申上候、先者右御伺まで 頓首 二月一日夜

拜復(省略)御照會の件左に御回答申上候 旭光齋は御尋の通り齋の誤にて候宗旨は眞言宗に候因に當地は本家が院號ふれば分家は齋號の習慣に候(中略) 父は儀八郎本年六十八歳大地主小原儀十郎の弟にて分家せしもの、兄弟五人、四人は皆分家かしおり候、又同胞は長女さへ次女きい長男眞一郎次男芳雄三男重徳三女さとの六人にて、亡弟の妻は叔女小原政吉の長女にて、やす子と云い廿歳にて御座候 先年母病氣の際に御地へまいり故小川先生並に貴下の治療を仰ぎ御座候にて目下健康に起居致し候折小川先生の物故を語り人生の果敢ふきを嘆き惜

二五

しみ居り申候(下畧)

二月十三日朝

拜復御多忙申いろく御配慮を忝ふし奉謝候標本の儀本日鐵道小荷物にて御示の通り金澤醫學專門學校病理教室村上庄太先生宛にて御送附申上候間御寄贈の件何卒宜敷御願申上候(申畧)乍末筆村上先生、岡本様始め皆々様へ宜敷御鳳聲被成下度奉願候、右御願まで、尙先般御送附申上候寫眞は御序の時にてよろしく候間左様御承引被下度候 二月十九日

試に地圖を案するに、諏訪湖に源を發する彼の天龍川に沿ふて飯田街道を南下するに幾許ならず右岸松島に近く中箕輪ある一村あるに氣附くてあらふ、陸地測量部の地圖では長野高山甲府飯田の四枚をツギ合はして見ざれば一寸位置の判定が困難であるが、その東西南中の同名異村があるより見れば昔は此邊一帶箕輪の郷とても云ひし處にやと思はる、名にし負ふ天龍川は脚下に流れ遠州方面に奔るが、後ろは山一つあふたに權平峠を隔て、木曾福島の方へ通するのである

其に就ても余は去廿六年晩夏立山越をなし信州大町に出て明科驛より松本を經鹽尻峠を越て上諏訪岐阜屋に一泊したことを想ひ出さずには居られぬ、鹽尻の頂上に立つて涼風に汗ふきながら重疊せる翠巒の間鏡の如き諏訪湖を瞰下しつゝ、更に遠く天の一方を仰げば、拭つたやうな空合に紫かゝつた薄曇色をした芙蓉万仞の峰が八合目以上を現はしてボカしたやうにヌツト懸る處、實に何とも形容の辭がつかつた、古歌に所謂「信濃あるころもが崎を來て見れば富士のうへこぐ海士の釣舟」と一心あてて雲間はあをもふもこにておもはぬ空にばるゝ富士のれゝを偶然一所に見たのである、そのさきの印象は余が會て黄金山砲臺上戦後の旅順を瞻望したときよりも牡丹臺上雄大なる鷄林の江山に嘯いたときよりも、將た白山頂上に立

つて涙がこぼれ白雲の間より日出の壯觀を見たときよりも更に富士自身に登りてオモチヤ箱を引繰り返へした様おさき十三州に驚いたときよりも、更に最も深く刻み込まれてあるのである
由來山紫水明の地偉人を生ずと云ふが、江山洵に美なる彼の玉の如き天龍の水彼の崇高き富士の峰、こゝに凝つて君さあつたのではあるまいか、今や中央線も五月一日より全通すべく、鐵路木曾山中を踏破し下諏訪より中箕輪の里に出て、親しく君が死所を吊ひ親しく君が遺物を見且つ親しく君を地下に喚起して相共に語らんばさほど困難ならざるべけれども、余は日常東海線を進る諸士にも天龍川を淪ゆる度毎に北方雲深き處切に亡き君を偲はんことを落ふものである

而して當時の通信は本誌第廿九號漫錄欄に小川雜誌部長によりて旅行私信を題して投載せられ、且つ匿名を願ひしより乙口十生とてあるが、文中妙からず誤植が多いけれども、是れ余が本誌に頑筆を載せた初である、爾後故先生の頻りに書けと勧めらるゝにまかせ、いつしか先生に化せられ聊か筆無精の譏を脱することを得たのであるが、君には此通信に就て渡邊兄弟の諏訪出身にあらざること其他いろ／＼の話をせられた、而して今や本誌に初めて紹介せられたる小川先生も又注意を加へられたる小原君もともに白雲帝郷の人となられしとは、さてもつれなき世ある談である、噫

十四年三月二十日

於彦三町一番丁之寓

八田 生 識

故小原芳雄君は在京中時々「科學世界」に稿を寄せられたり聞き如何ある縁より斯くはものするに至りしやふと編輯署名の織戸氏に問合はす處ありしに折返し左の如く故人との關係を詳報せられたるは深く感謝する處あり、直に前掲出の稿中へ挿入すべく思ひしも掲載に就ては一應全氏の承諾を得るの必要あると且つは學會出席の爲め上京せしとの爲め遂に印刷の期

に連れ更に追加して茲に掲ぐるの止むべきに至れるは織戸氏並に會員各位に對して特に宥恕を乞ふ所以あり
八田生

* * * * *

拜啓過日來度々御照會の小原君の件實は早速御返事可仕答の處折節小生方轉居等彼是多忙に取紛れ心ならずも延引致候段不惡願上候

小生の小原君と相知りしは昨年の一二月頃か、存候當時小生種々繁忙を極め自ら外國圖書の翻譯をなすに、時間要し思ふ様に

參らぬものから時事新報に餘暇に翻譯依頼致度し(英獨語をやるもの)と申し申候處其節小原君より小生に手紙を寄せて何か研究になること

あれば只今餘暇あることゆへ何か致度し但し小生は英獨二つは六ヶ數候も獨らば何の手傳ふも宜しく自分も書くことは好む處この事ゆ

へ然らば婦人の美論と申す獨人「ストラッツ」氏著の翻譯を依頼致度しと云ひ同時に他の書物も依頼仕候斯くて同君は本郷の細海と申す處に

寄寓致され且つ大學病理教室に入られ居り候様なりしが相次て巢鴨の陽明醫院を助くべく通ひ間もふく陽明醫院を引受けられたりと覺ふ申候

此間翻譯も中々進び申さず轉居又は御病氣等の爲め小生も巢鴨の方へ參りては其様子を見て催促も出来兼ねいづくも唯空しく歸るを常致候

全君には五度ばかり參られ時には晚餐を共にせることも有之亦小生も度々參り申候此の如く終始互に好意を表しつゝ相往來し且つ相交り申

然る處此間に竹の方は漸く草稿紙にて二十三枚ばかり得候へども此の方は婦人美よりも急き候爲め一日も早くこの念切あるも右の次第にて

數ヶ月を経るも完成の運に至るはさては六ヶ數様子につき右書は私方へ引取るの止むを得ざるに立ち至り申候婦人美の方は昨年十一月頃までとの約ありしも是亦心残りながら催促も致されずついで御永眠ま

(漫録)

でその儘に打過き申候此間ガス、タイプの目錄を三枚ばかり譯し貰ひ且つ相往來の間に科學世界に何か執筆致度しとの事にて御地の雜誌御掲載の住血吸虫の稿を寄せられ其後面白き心臓の畸形と申すを寄せられ申候

前述の次第にて婦人美の件は小生の御願せし譯にてそれを骨子として更に文學及世界風俗のことを加へ且某博士の人体に就ての稿を附加へ

博士と小生との合著とし出版致す豫定にて候へき右に就き小原君は科學世界には別に之と申す御約束も仕らず只小生の友人として其寄稿せられたるものを掲載致候次第に候

要するに小原君は着實濃厚なる人にして小生も誠に残念に存居候又令室には御面會の節互に産の事ともその他種々物語り仕候ことも有之候

而して突然兄君より御永眠の報を受けたるときはマサカと存候殊に兄君御上京の折私方へ御立寄ありいろく其模様を拜承したるときは思はず落涙仕候

貴下は小原君とは如何なる御關係ありしやは存じ申さず候へども中々の御心盡し誠に感銘の至りに候過日は又態々十全會雜誌御送り被下深く御禮申上候

また申上度ことも御座候へども居常繁忙ある小生のことにて之にて失禮仕候 匂々不

三月廿五日
東京牛込區甲良町二十番地
科學世界編輯局 織田正滿

* * * * *

三七

雜錄

●本邦の製藥事業

先般來大阪朝日新聞紙上に連載せる産業大觀中に於て本邦の製藥事業を左の如く言へり、

▲昔から藥九層倍と云ふ大に有望なる事業である、生憎此の事業には明確な統計がない農商務省の調査によると四十一年度の産額三百三十七萬圓、工業藥二百七十四萬圓、樟腦及び同油九十六萬圓(總て臺灣を除く)と云ふ事であるけれど當業者間の觀測では醫藥のみにて方今正に五百萬圓以上工業藥は少くとも四百萬圓は下るまいこの事

▲我が特産物のやうに言ひ囃されて居る薄荷及び薄荷油、樟腦及び樟腦油は臺灣を合して約六百萬圓大に聲價を上げては居るが、醫藥中にも沃度及び沃度製劑は年額方に百萬圓を越へ其他炭酸マグネシヤ、肝油、醋酸、丁幾、越幾斯、舍利別、舍利鹽等も年々夥しく産額を増進して來た

▲實藥以外總ての藥劑を合して年産額千六七百萬圓を下るまいとすれば累年の増進率は少くとも一割乃至二割の處にあると云はればならぬ、最近三箇年間に於ける諸藥輸出入左の如し

年	輸 出	輸 入
四十一年	六、一二四、三六七	一八、五七七、八八七
四十二年	八、七〇〇、九八二	一七、二七七、七八六
四十三年	八、三九六、六二六	二二、〇三二、七六五

▲此の表に據るに輸入の輸出に超過するも千三百七十萬圓、大に内地製藥

の餘地がある如く見ゆる又實際にあるに違ひない去りながら輸入藥劑中には内地にて製藥の出來ない物も多い、即ち輸入主藥品の一部である苛性曹達、苛性加里、重炭酸曹達、曹達灰の類は現に各所に於て製造されつゝあるも左の諸品は輸入額の多量なるにも拘らず今尙製造するものが殆どない酒石酸、礬砂、次硝酸蒼鉛、硼酸、ザリチル酸、キニーネ、コカイン、枸橼酸、水銀、甘草、モルホ子、ペブシン、乳糖、ワセリン、

▲一つは原料の少ない勢もあらう其の代り皆く先鞭を付けたものは非常に優越る地位に立つてあらう全國の主たる製藥所左の如し

製藥所	資本金
東京製藥	十萬圓
帝國製藥	一萬圓
浪速製藥	五萬圓
京都製藥	五千圓
松永製藥	三萬圓
丸石製藥	三萬圓
日本化學	百萬圓
廣島衛生	一萬圓
名古屋製藥	二萬圓
廣業合資	十萬圓
大日本製藥	三十萬圓
日本醋酸	三十萬圓
大阪精製	一萬圓
東京藥品	五萬圓

▲此の外工業製藥所として日本舍密大阪舍密工業、大阪晒粉、大阪アルカリ、東京人造、關東硫曹、堺硫酸等のある事は今更云ふ迄もない、茲に一つ計畫を中止したの、夫れこそ奮發して事業を開始するのトシ旗色の鮮明を缺いて居る住友と云ふのがある此所な四坂精煉所が煙害除却の一手段として硫酸の採取を始めること夫れこそ東洋の硫酸市價が崩れて我一部の化學工業界には餘程の好影響を齎さうと云ふもの

▲製藥業の利益は近年大抵一割以上の純益を擧げて居る最も中には五六朱又無配當と云ふものも無い、こもかい然し又二割又は三割ほどの利益を擧げた處もある

▲凡そ何程の事業を問はず競争は自然の成行である又唯一の向上手段であ

る然るに醫藥製劑事業には衛生試驗所と云ふものがあつて幾分競争の範圍を狭め又臺灣研究所關東中央試驗所と云ふ關所を設けて殊更事業の伸張を妨げて居る嫌ひがある臺灣及び大連の關所は和製ローズ君の發案であるさうか、何も内地で免許された製劑を態々大連又は臺灣三界に關所を設けて再試験を行ふ必要も、いだらうに七面倒な種々の關所を設けて殊更斯業者を虐め附けたり又規則を連發する處が所謂和口君の和口君たることろださ。

● 酒精讓造事業

同トく産業大觀中酒精讓造事業に就ては左の如く云へり
▲税率の關係から兎角密造犯人の附纏はれる事業であるけれど、ことによる價格の都合で二割三割と云やうな大利益を擧げ得らると云ふホロい仕事あり。

▲何にせよ原料は甘藷、小麥、穀、高粱、玉蜀黍、碎米、糖蜜等が主で其の他有くも澱粉を含んだ直段の安い品物であるからば片端から原料に使用し得られる事業であるから面白い次第さ。

▲大藏省の報告によると四十二年の産額は一萬三千石である四十三年度は一萬五千石以上に達した事と思はれる、試みに全國中主要なる酒精製造所並に各一箇月の平均産出能力を掲げると。

攝津酒精會社	三百石	神戸酒精	五六十石
北海道神谷酒精	四百石	大日本製糖	三百石
宇和島日本酒精	三百石	熊本酒精	二百石
日本製藥會社	百五六十石	臺灣製糖	百五十石
森澤酒精所	三十石	四日市酒精	三十石

▲以上の産出能力を全運轉で以て酒精を造られるとすると一箇月二千石以上

上の製品が供給される都合であるから事實は各工場共一割乃至四割方の自由制限を行ひ自衛的に市場の調節を計つて居る。

▲製造上の計算を聞いて見ると技術又は相場の都合にて多少の相違はあるけれども、普通價格勘定で甘藷八割七八歩、穀一割内外、小麥二三歩の割合で生甘藷一貫匁から十三オンス乃至十五オンスの酒精が採れる。

▲昨今の相場が酒精一封度十一二錢(工業用)見當であるとするれば一貫目四錢五厘の甘藷をし使つたまで原料費以外に五六錢の加工費を得られることろふ譯。

▲また酒精を蒸溜した残りの滓糟は豚の食料として大抵副業に養豚をやつてゐる、月三百石の酒精を産出する工場では三四百頭以上の豚が飼へることろ。

▲是れ丈の計算を聞くに餘りにホロ過ぎる勿論此外に固定資本の償却代經營費等に相當の支出を要するは知れ切つた事、又納税擔保にも尠からざる保証金が要る、詳しい計算は憚り置くとして甘藷が五錢以上に騰貴すると収入償はふい事もあることを附言して置く。

▲酒精の關稅は毎リツトル從價七歩三厘内地品の課稅は一封度一圓即ち外品一封度四十三錢内地品二十八錢に相當するから外品の輸入は殆ど杜絶して四十一年の一萬六千五百圓の輸入を見たのも四十二年には一萬六千圓に又四十三年には一萬二千二百圓に減退した。

▲此の品の用途としては燃料用醫藥用などは殆ど九牛の一毛にも足らぬ主たる消費先は化粧用品、エーテル製作用、セルロイド製造用、ニス又は塗料の混合用或は乾燥用、概章製造用、混成酒用等て工業の發達するに従つて益需要が増加する、殊に堺及網干セルロイド會社の建設は空谷の甍音の様に斯界に傳はつてゐる。

▲然れども内地原料の拂底も漸く聞ひ出した、中には製品の低落に大分左前の工場も出来かけたが内地酒精の値段は今尙安いとは云へない。

▲税金關係を離れて内外兩品の市價を較べるに外品の方が約二割方も安い、一兩年前から内地の製造は生産過多の傾きて製品は絶えず市場に停滯して居りながら未だ一滴も眞箇海外の輸出の行はれぬのは全く保護關稅の惡影響とも云へる。

▲此の事業さて何時迄も搖籠の中に育てられる筈のものでない、氣の毒ながらお乳母日傘も今年限り、明年限り精々今の間に乳の飲み置きてもして置くがよい追附け驚天動地の大革命イヤサ酒精界の大擾亂を惹き起してアツト云ふ間に既設事業を根本から破壊してしまさうと途方もない謀反を計畫して居る手合が臺灣の一角から現はれた。

▲臺灣では八箇の製糖會社が盛に分密糖の製造をやつて居る、昨年末の甘蔗消費能力は一萬八千三十五噸、前期製糖額は二億三千二百萬斤同糖蜜の產出三千四百萬斤に上つた、近き將來には北港、新高、帝國、中央、斗六、臺北、賀田、苗栗などの八千五百三十五噸の機械が動いて宛に角四十八年には砂糖六億五千萬斤糖蜜九千萬斤の出來る豫算にあつて居る糖蜜は恰も無盡藏であるかのやう。

▲そこで臺灣製糖の明治製糖の二會社が一番此無盡藏の糖蜜を利用し酒精事業兼營をまつ始めんと、殊に臺灣製糖は現在内地の消化程度である一年一萬八千石を目安に置いて、一箇月の產出千五百石即ち一年一萬八千石の設計を立て獨逸の技手を僱聘する事にあつた。

▲明治製糖も亦年千七百八十石の器械を買入れた、而して兩社ともまさに工場建設中である、臺灣製糖は此の六月に一部の竣成を見るとの情報サア斯うあつたらどうせ臺灣と内地との對抗戦争を起すの外はない内地の既設事業が顛覆されるか臺灣の事業が生れぬ先にたゞ潰されるか、巨砲一發飛んで霹靂とかり天地震撼斯界暗黒の光景を見るのは來年のことだらう臺灣の製品が良いか悪いかは蓋し問題にからん。

● ヨードに就て

藥學博士池口慶三氏曩に官命を帯びて歐米へ出張せし際農商務省の囑托を受けヨード業に就て調査せし實狀に鑑みたる意見を茲に掲ぐ

千九百十七年十二月末日の調査に依れば智利國中ヨード製造者は約九十九人ありて該一ヶ年ヨードの製産力は九萬九千二百五十六、六八クイントル即ち一千六萬八千三百四十九、四八磅(一クイントルは千六百二十三オンスに當る)とす

然れども此大量を輸出せばヨードの價格を下落せしむべきを以て一ヶ年平均九千クイントル即ち九十一萬二千九百三十七、五磅を輸出するに過ぎずして千八百九十二年以來よりの積荷高は現今尙二萬二百四十九クイントル即ち二百五萬四千七、九磅ありと云ふ。

ヨードは主として醫藥用に供するヨード化合物及其製劑を製造するに使用せられヨードエオジンの如き色素製造に使用せらるゝの量は極めて少量あり、最新の調査に依れば全世界中ヨードの消費高は平均一萬クイントル即ち百一萬四千三百七十五磅ありとす(日本を除く)、從て智利産ヨードは世界ヨード消費高の十分の九を占め歐洲海草ヨードの消費高は約十萬磅に過ぎずと云ふ、又智利よりは平均九千クイントルを輸出するも實際には一萬クイントルに當る利益部割を得ると云ふ

最近廿五年間に於て歐洲に於けるヨード卸賣相場は最高一オンスに就き三十二オンス最少三オンスにして一千九百五年に於ては最高十オンス半最少六オンスあり而して其頃の卸賣相場は一オンスに就き六オンスありと云へり

現今トラストに加入せるものは英國佛國、ノルウエー及アメリカにして北米は之れに加入せず、四十一年一月十三日及廿日の兩日智利ヨードトラスト代表者アントニー、ギツプス及スコットランド海草ヨードの代表法學博

士ボール、ロツテンパークに會見す、其の問答要領左の如し
 第一にトラストの組織、規約、スコットランド及フランスに對する協定高
 に對し質問を發せしも只相當製造制限量を定め之に對する利益分配をふし
 又兩國の協定量は極めて少量なりとて要量を得べき答辨を爲さず

彼等は曰く日本智利ヨードが如何に多量に産出せらるゝか又智利ヨードが
 如何に廉價に補造せらるゝか(製産費は殆んど零ふるを以てヨード一オン
 ス一ペンスにても尙利益ありと云ふ)を知らずして我トラストと競争せん
 とするを最も氣の毒に感ず我トラストの財政は甚だ豊富にして實際には多
 量のヨードを貯藏す、獨逸ハンブルグ港倉庫を一覽せば必ず一瞥を喫せん、
 日本が我トラストの情況を理解したる後然かも尙競争せんを欲せば何時に
 ても之に應戰するの覺悟あるみならず容易く日本のヨード業を打破する事
 を得可し、日本たるもの宜しく熟考を要すと大言せり

依て余はトラストが日本と協定せんをせば如何なる條件を以てするかを聞
 きしに明細ある條件を語らずして曰く日本がトラストを協定せんとするの
 眞意あらば先づ日本國內の全ヨード業者の聯合を計る可し、鞏固ある聯合
 なくして協定何の効を奏せん聯合成功の後協定に應ぜん、其以前に於て豫
 め其條件を定むるの必要を認めずと

更に聯合を計るには其豫定條件を知るの必要ありとて再三強請せしに彼は
 嘗てノルウエーに許容したる量即ち二十噸從て四萬四千八百磅(一噸は二
 千二百四十磅に當る)位の制限量ならば協定することを得ん、此量たる全
 世界需要高の約二十分の一なりと云へり、(十數年前迄はノルウエーは日本
 の現況を同一の情態にありて後にトラストに屈服せしものなりと附言す)、
 何を以て標準とするかを聞きしに明答せざるも恐くは日本、支那、朝鮮の
 需用高を標準とせんとするものゝ如し、其は餘りに少額なりとて論争せし
 に彼は設ひ少額なるにもせよ協定後は恐らく一オンスに就き九ペンス位に
 上る可きを以て却つて現ヨード業者に利益ある可しと云へり

ヨードラストよりヨードを買ひしものが一旦トラスト以外のヨードを買ひ
 たること暴露したるときは其者が他日必要に應じトラストヨードを買はん
 とするもトラストは絶對的に之を拒絶す、其他種々の手段を弄してトラス
 ト以外のヨード購求者を苦ましむ、從つて歐米に於ては斯の如きヨードト
 ラストの專横を忿るもの多く從つてベルリン及ロンドンに於て余が面會せ
 し製業者又は薬品問屋中若し日本に於て秘密に輸入を爲し然かも年々契約
 量に相違なく且較々廉價に供給し與るゝに於ては取引約束を結ばんと云ふ
 者あり、然れども年々契約量を確實に輸出し得るかを懸念せり

要するに智利ヨードが極めて多量に且非常に廉價に製出せられ得べきは歐
 米斯學斯道者の異口同音に稱ふる所にして今日に於ては最早疑ふに一點の
 餘地なき事實あり、而してヨード、其化合物及製劑は主として醫藥用に供
 せられ工業上着色料製造に使用せらるゝの量は比較的僅少なり從つて世界
 に於けるヨードの需用高は存外多量ならず、此の如く供給多く需用少ふき
 に尙ほヨードの價高きは智利ヨード業者及海草ヨード業者のトラスト設立
 の結果に外ならず、然るに我國のヨード業者は該トラストに加入せずして
 年々我國より較々廉價のヨードを輸出する量漸次多量ふらんとするより頗
 回ヨード相場の變動下落を見るに至りトラストは日本産ヨードの全減を企
 圖して甘言、威嚇、壓迫種々の政策を弄し日本ヨード業者を苦しめし事爰
 に喋々を要せざるあり、從來の經驗に徴しトラストが如何に壓迫を加ふる
 も日本産ヨードの全減を見るが如きは殆んど不可能の事に屬すれどもトラス
 トと競争の結果永久の勝利を期し難きを以て將來の方針としてトラス
 トに加入すること萬全の策なれども現今トラストが協定んとするが如き不
 利の條件にて加入する必要なし、而して將來有利なる條件を以て加入せん
 とするにも將た又た絶對的競争を爲さんとするにも最も緊要なるは
 第一、外國より輸入するヨード、其化合物及製劑には重税を課する事
 第二、鞏固ある日本ヨードトラストを設立する事

第三、前項組合に加入する者に非ざればヨードの製造販賣を爲すこと能はざることを以て違背者には出來得る限り重き制裁を附する事

第四、組合は隨機應變ヨードの製産力及輸出量を制限して成る可く欧州トラストに影響を與ふる事を避くる事

第五、前項に對し組合に成る可く支那、朝鮮に、多量のヨード劑を賣り附くる手段を講ずる事

第六、組合は秘密に歐米製藥業者と直接取引の途を講ずる事

第七、組合に前項の直接取引者には秘密に且要約量は幾年にても供給し得る準備を爲す事

にあり、然るときは日本ヨードの基礎を鞏固からしめ必要の場合には有利なる條件を以て歐米ヨードトラストに加入するを得べし、要は先づ政府の監督及保護の下に鞏固なる日本ヨードトラストを設立せしむるにありと信ず

●尿中蛋白の試験

横井 鉦太郎

臨床的尿検査中往々遭遇するものは糖及蛋白なりとす、糖に就ては先に報告したるを以て今回は蛋白試験の成績を報告せんこととす、但し現今尙研究中に屬するを以て他日更めて報告するの期ありと信ず

尿中に顯わるる蛋白質は主として蛋白グロブリン、アルブミン、フィブリン等あり、而して余の目的物は蛋白を主とせり

臨床的試験の要は法方簡便、反應確然にして鋭敏なるものを選択するにあり、惜哉余の行ひたる試験中適當と認むるもの稀なるを如何にせん

試験の方法は健康尿を取り最初各試験に付き試験し全然反應なきを確められに各目的%に鶏卵白を加ふ但鶏卵白は乾燥蛋白の%量にして初め卵白を

乾燥して乾燥蛋白量を知り濕潤物を乾燥物に換算したるものあり
今回余の試験したる試験法左の如し

(1)アルメン氏法 検尿六分の一に二十%單尼酸酒精を加ふるときは濁濁或は沈澱を生ず

(2)ガリツプ氏法 検尿にピクリン酸の飽和水溶液を滴加するか或は其結晶を加ふるときは黄色の潤濁或は沈澱を生ず

(3)ハイニシュース氏法 検尿に少量の醋酸を加へたるものゝ六分の一に食鹽飽和水溶液を加へ煮沸すれば白濁或は白澱を生ず

(4)ブツヘル氏法 検尿に數滴の硝酸を加へ次に食鹽飽和水溶液を加へ煮沸するときは類黄色の潤濁或は沈澱を生ず

(5)硫酸麻痺涅失亞反應 検尿に醋酸野滴を加へ同容量の硫酸麻痺涅失亞飽和水溶液を加へ煮沸すれば白濁或は白澱を生ず

(6)ロベルツ氏法 検尿に同容量の食鹽飽和水溶液を加へ次に5%鹽酸を試験管壁に沿て徐ろに加ふればヘルレル氏法と同じく環輪を生ず

(7)ヘルレル氏法 少量の純硝酸をピベットを介して試験管中の尿に徐々に加ふるときは二液接觸面に環輪を生ず

(8)ペデツケル氏法 試験管の三分の一を盈てたる検尿に醋酸を加へ強酸性となし之れに其一二分の黄色血鹽水溶液(5%)を加ふるときは白濁或は白澱を生ず

(9)マイエラ氏法 昇汞一分枸橼酸一分食鹽〇、八分水一〇〇分の液を検尿五一一〇立方仙にピベットの介を以て五立方仙を加ふる時は兩液の接觸面に白輪を生ず

(10)ウホイセツト氏法 検尿に亞硝酸を含む鹽酸或は硫酸を加へフォルムアルデヒッド百分の一存在するときは紫紅乃至藍色を呈す但フォルムアルデヒッド及亞硝酸の過剰は反應を妨害す且つ膠、アルブミン等も此反應あり

(11) ムレー氏法 檢尿二十乃至三十滴に五%スルホサリチル酸溶液を加ふれば白濁或は白濁を生ず此反應は蛋白質中蛋白の外に一も反應せず、但プロテイン蛋白との區別は熱時プロテインの白濁は澄明に溶解する以て容易に鑑識し得

(12) プライレンツ氏法 檢尿に新鮮なる異性燐酸の一結晶片を投ずれば白濁は白濁す若し試薬新鮮ならざるときはオルト燐酸に變ずるを以て反應せざるこあり

(13) アキセンフェルト氏法 〇、一%鹽化金液一滴を蟻酸を以て酸性さあせる檢尿中へ加ふる時は緋紅色を呈す

(14) アダムキエウ井ツツ氏法 濃硫酸一容と氷醋酸の少量を檢尿中に加ふれば紫色を呈し綠色の螢石彩を放つ、ムステル氏は之れに食鹽を加ふれば尙一層反應を増進すと曰へり

(15) スピーゲレル氏法 昇永八、〇酒石酸四、〇グリセリン或は單舍利別二〇、水二〇〇、〇の液二三立方仙を試験管に取り檢尿を重疊し二液層を造るときは其接觸面に白輪を生ず

右試薬を以て先づ健康尿を試験し無反應を確めたる尿に蛋白を〇、一〇、〇三〇、〇〇一〇、〇〇三〇、〇〇〇二の割に加へて溶解し比較試験を行ふに次の如し

試験ノ種類	含有蛋白ノ%量
(1) アルメン氏法	〇・一 〇・三 〇・〇〇一 〇・〇〇〇一 〇・〇〇〇一
(2) ガリツプ氏法	著明 著明 有 僅 僅微
(3) ハイニシユス氏法	僅 僅 一 一 一
(4) プツヘル氏法	僅 僅 一 一 一
(5) 硫酸麻痺涅失亞法	僅微 僅微 一 一 一
(6) ロベルツ氏法	僅微 一 一 一 一

(雜錄)

(7) ヘルレル氏法 著明 微 一 一
 (8) ベテツケル氏法 著明 僅微 一 一
 (9) マイエラ氏法 著明 僅微 一 一
 (10) ウホイセツト氏法 一 一 一 一
 (11) ムレー氏法 著明 僅 僅微 一
 (12) プライレンツ氏法 僅 一 一 一
 (13) アキセンフェルト氏法 一 一 一 一
 (14) アダムキエウ井ツツ氏法 健康尿ニテ此反應アリ
 (15) スピーゲレル氏法 著明 微 僅微 最僅微

以上表の示す如く最も鋭敏なるは(1)ア氏法(15)ス氏法なり、然れども(1)ア氏法は健康尿に於て僅微の反應あるを以て〇、〇〇〇三%以下の反應は必ず蛋白を含有するものと認るこ能はず、依て(15)ス氏法は本試験中の最も鋭敏なるものありそれに次で(11)ム氏法にして其他(2)ガ氏(7)ヘ氏(8)ベ氏(9)マ氏法は第三位に、(3)ハ氏法(4)プヘ氏法(8)硫酸法(12)プレ氏法は〇、一%以下には反應せず故に實用に適せざるものあり、(13)ア、セ氏(14)ア、キ氏法は無論贅法ならんか
 此成績を試験法創案者及實驗者の言へる鋭敏度に比較するに非常の差を認む、即ち本成績中最も鋭敏なる(15)ス氏法は創案者の説によれば廿五萬分の一の蛋白にて反應ありと、又(11)ム氏法はロツホ氏の實驗によれば十三萬分の一の蛋白にて反應ありと、又(11)ム氏法は三萬分の一に於てすら殆んど反應を認むるに困難ありし、(11)ム氏法は三萬分以下に反應なし又古くより用ひらる(7)ヘ氏法はメルチル氏の實驗によれば一萬二千分の一の蛋白にて反應ありと、(11)ム氏法は三萬分以下に反應ありのみ、此懸隔は何に原因するものありや余が試験に就ては充分なる注意を拂ひたりしを以て蛋白の撰擇によるか、此蛋白の撰擇は鷓卵白を取る計と血清蛋白を取る説の二あれども必ず

何の蛋白によるや一定し居らざるを以て容易に得易き鶏卵白を取れり、然れども如此く懸隔甚だしきを以て今血清蛋白に付き試験中あり、蓋し健康尿中蛋白の存在に就ては學者の說區々にして如何なる分量迄は生理的のものなりや未だ學者の說一定せざる時此比較試験は強ち無益の業にあらざるべしと信じ此拙劣ある稿を草せり讀者之を諒せよ。

●脚氣の病原的研究

遠山博士が先達の消化器病學會に於て試みられたる見出の演説の梗概を摘記せんに、演者は鶏、鵠、鳩、文鳥、「ツウシヤツ」等數百羽に就き試験の結果

一、白米を與ふる時は試験動物は發病し、之に反し玄米、熟米、白米に糠を混じ、麥、赤豆等を與ふる時は發病せざるのみならず、白米に由りて發病せしも之を與ふる時は驚くべく速かに治癒する事を證明したり。

次に演者は糠に有する豫防力を以て其木纖維の單純なる器械的刺戟の腸管に作用するに基くこの説を排し、自家の實驗に依れば動物に木質纖維末又は粘土粉末を白米に加へて與いたるも糠の如く發病を豫防すること能はざりしと述べ、然れども

一、白米と糠とが動物試験上、前述の如く著明なる差異ある以上は必ず二者の性質に著明なる差異無かるべからざるべし研究の結果左の數項を見出せりと。

- 1 糠は Enzym を多く含む
- 2 糠は Zucker を多く含む
- 3 糠は既に從來知られたる分析成分上白米より燐、鐵、無機鹽等に富む
- 4 糠は澱粉を融解する性强し

5 糠は酸性特に強盛あり
以上五項中 1—3 は豫防力に關係なく、4—5 は同一成分の作用あることを知り著者は 5 に就て研究を進めたり。

即ち糠の酸性成分は、水或は「アルコーン」に浸出し、之より製せる各種の成劑は殆んど同一左記の性質を有す。

a 酸性反應あり

b 揮發性あり

c 豫防の効あり

d 試験藥珠に Phosphormolekular に対する明の綠色反應あり

e 蛙心鼓動數を減少するの作用あり

f 「マウス」に對する毒性（中和すれば毒性を失ふ）あり

此酸は發病に適する白米に乏く或は缺如し。豫防力ある糠、(玄米熟米其他) に多量に存在し終始豫防力に密接關係するを以て豫防力は此酸成分に歸するを至當とす。

此酸は「アルコーン」浸液より種々の方法を以て殆んど純粹にふす事を得又た少量の結晶を形成せしむるを得、而して此酸は燐又は鐵を含まず勿論蛋白質、Enzym にあらず Phytin, Nektan にあらず脂肪酸、醗酵酸其他既知の有機酸に一致せず。而して演者は之に銀皮酸 (Silberhautsäure) の名を與へたり。

次に演者は自家の試験研究より鳥類の多發神經炎と人類の脚氣と一致する者ありし、更に左の如く結論せり。

一、脚氣は傳染病に非らず。其理由は

- 1 患者の血液、臟器、分泌物、排泄物等を多數に研究したれども曾て特異なる細菌又は「プロトツォア」を證明すること能はず
- 2 演者の試験に一動物は幾回も同病に罹らしむることを得而かも些も抵抗力を増すこと無く却て次第に之に罹り易し

3 發病動物の血液、器臟、を取りて感取性ある動物に接種するも決して感染することなし「コンプレメント」結合試験を行ふも常に陰性あり

二、脚氣は中毒症にあらず、其理由は
1 白米と糠とに對し「アルカロイド」其他の化學的反應を試むるに白米は凡てに對して反應少く玄米に多し

2 白米に就き Fomenhe, Dianyne, Famine 等の製法に由りて得たる試験物を動物の腹腔、靜脈等に注射したれども一も多發神經炎は勿論中毒症を發すること無し

3 白米の浸液を動物の常食に加へて飼養するも決して發病すること無し
三、脚氣は確かに物質交換病にして偏食 (Einsseitige Ernährung) に因る營養障害たる事疑ふべからず。而かも一般の營養障害にあらずして所謂部分的營養障害ありと爲し、演者は此部分的營養障害の存在せざるべからざる理由を細胞の特異「リセプトール」の特異なる營養素との Nutriziporen を以て種々之を説明し最後に脚氣は食物の偏取に由りて來る所の酸の缺損に歸すべしと結論したり。

* * * * *

内地雜報

●昨年中の醫師増減

業及新登録者數左の如し。
昨四十三年一月以來十二月末日迄の死亡廢業

(内地雜報)

登録者 千七百八十四人
死亡者 九百五十八人
廢業 四十三人
差引増加 七百八十三名

右の如くにして昨年末の醫師現在三萬七千三人なり。此内六十名は外國人ありといふ。又齒科醫師は

登録者 六十四人
死亡及廢業者 十四人
差引増加 五十名

よりといふ。双方とも驚く可き増加からずや。

●藥劑官現在數

去三月一日現在の陸海軍藥劑官員數左の如しと

▲陸軍		▲海軍	
一等藥劑正	一人	二等藥劑正	一人
三等藥劑正	七人	一等藥劑官	三十三人
二等藥劑官	四十六人	三等藥劑官	二十人
藥劑大監	二人	藥劑中監	三人
藥劑少監	六人	大藥劑士	九人

●在外本邦醫師數

昨年末外務の調査によるに本邦の醫師にして海外に在住せるもの及其所在は左の如し。

▲清國	▲北京	▲一四
頭道溝	一	

安東	一七	芝罘	五
奉天	一九	上海	七四
遼陽	七	南京	九
鐵嶺	一三	蘇州	二
新民府	三	杭州	七
牛莊	八〇	漢口	七
長春	二一	長沙	四
吉林	四	福州	二
哈爾濱	一一	廈門	二
齊齊哈爾	一一	汕頭	一二
天津	二二		
▲英領		浦鹽	二一
香港	八	▲英領加奈陀	一〇
新嘉坡	三三	晚香坡	八
▲米領		▲秘露里馬	一〇
マニラ	七	里馬	八
▲暹羅		▲墨西哥	一七
盤谷	八	墨西哥	一七
▲英領印度		▲北米合衆國	五五
カルカッタ	二	ホノル、	六九
シカゴ	三	桑港	三〇
ポートランド	一一	シヤトル	三〇
▲露領亞西亞			

者約八十名あり、此他に禪太に開業せるもの等を合計せば、本邦醫師にして内地以外に開業せる者は千名以上に達すべしといふ。而して是等の開業者は何れも相當の收入を得つゝあり、且つ之が爲め本邦出稼民の利便を受くる事甚だ少からざるなりと、而て居留地外人との關係も、本邦醫師の開業せる爲何事も極めて圓滿に行はれつゝありて、外務當局者は、本邦移民の所在地には是非本邦醫師の開業せん事を希望し居れり云ふ。又之を一昨年未の調査に比すれば地方によりて減少せる所もあれど、全體よりせば増加し居れり云ふ。

●賣藥稅逐年増加

大藏省に於て調査せられし所によるに去四十二年の賣藥稅收入は

印紙稅 百七十二萬三千四百二十五圓

營業稅 二十三萬三千三百十八圓

合計 百九十五萬六千七百七十三圓

なりしに、昨四十三年度の收入は

印紙稅 百九十四萬三千〇十七圓

營業稅 二十七萬二千七百一十一圓

合計 二百二十一萬五千七百二十八圓

に増加せり、即ち僅かに一十年に貳拾五萬八千九百五十五圓の増加あり。四十三年度には此他に尙賣藥類似品の收入四千二百七十一圓ありたりといふ。四十四年度には益々増加するべく、若し製劑取締法の發布せらるゝに於ては、此方のみも多額の收入あるべしと。

●全國の温泉

昨年内務省が各府縣に命じ調査せしめたる所によれば、將來發達の見込あるものゝみにて千二十一ヶ所にして、此他未だ發達

衛生課、臺灣病院、醫學校研究所等職員を以て組織し凡そ毎月一回會合し「マラリヤ」に關する新舊學說の討論、研究、實驗報告新刊書及雜誌類抄讀を爲す等醫學に關する智識の普及と同時に又衛生行政上に要する學術的資料を供給せんことを期せり。

△微生物學研究會 細菌學、原生動物學等を專攻する人々及斯學に興味を有する人々を以て組織し會員は醫師、獸醫、農工學者植物學者、人類學者等を網羅せり、同じく新刊雜誌類抄讀、或は研究及調査報告等を爲すを目的とする會合にして毎月一回總督府研究所内に開く。

△醫學校友會 醫學校職員生徒及卒業生に由て組織せられ講話、討論等主として、生徒の訓練、邦語の練習並に會員の親睦融和を圖ることを以て目的とし、毎月一月例會を開き、一年四回雜誌を發行す。

△臺灣マラリヤ撲滅策 臺灣に於けるペストは、近時殆んど全滅の狀況さふりたるが故に、今後の、傳染病豫防の主力を「マラリヤ」に傾注せんこの當局の趣旨に原づき、來年度に於ては大々的に豫防法實施の計畫中ふり、曩に樟腦採取地ふる甲仙埔に於てコツホ氏法に則るキニーチ豫防内服法を、約三十人の職工に應用し、期年にして非常好成績を示したりしが、この定期的キニーチ内服法は一定の團體組織にあらざれば其實施甚だ困難なる事情あるを以て、地方の狀況に應じ多少之を斟酌するの必要を生じ、臺灣廳下の温泉場北投に於て、マラリヤ寄生體携帶者を調査し、右携帶者には「キニーネ」の強制内服法を命じ、三四ヶ月間の成績は、是亦た頗る顯著の効を奏しつゝあり、明年より、各流行地の狀況を精査し、各其地方に適切なる方策を研究し、多くはこの携帶者發見及治療法を採用すべき豫定あり、但し「キニーチ」の用量及其内服方法等は、マラリヤ豫防委員會に於て、今尙ほ研究中なる由。

●陸軍の精神病者調査票

陸軍にては、今回徴兵の精神病者に對する調査報告及、其の分類別を左の如き形式に依ることせり、本票は總に内務省が示したる該患者の届け出でに關する小札式票に倣ひたるも、尙ほ別項第七の細名の如きは最も新らしき方法に依りて調製せるものありき。

一、番號は轉歸を取りたる順序に従ひ前年十二月一日より當年十一月盡日迄の一年間繼續すべし

二、豫備後備役者は其の役名を等級欄に記入すべし

三、患者入營前從事せし職業なきときは家計の主なる職業を記入す但職業は成るべく細別し又患者學生ふりしときは其の種類若し學校名と共に之を記入すべし

四、機動演習、射擊演習、討伐、航海中其の地營内以外に在りて發病せるものは土地名と共に之を發病場所欄に記入すべし

五、發病年月日欄には再患者にありては毎回の發病及治療年月並其の病症の概要と共に回数をも記入すべし

六、死亡者は其の死因を轉歸欄に記入すべし

七、病名は概左の種類に據る但虚脱性、熱性傳染病性、中毒性精神病及本記載外の精神病は其の細名を記載すべし

(一) 外傷性精神病

甲、官能的精神症 イ、外傷性「メラニコリ」 ロ、外傷性「ヒステリー」 ハ、外傷性神經衰弱

乙、精神衰弱症 イ、外傷性急性錯亂狀態 ロ、外傷性慢性精神病

病 ロ、外傷性癡呆

(二) 中樞神經系の機能的疾患に伴ふ精神異常(梅毒、卒中、脊髓癆等)
(三) 癲癇性精神病

(四)精神發育制止症 (イ)白癡 (ロ)癡愚

(五)早發性癡呆 (イ)破瓜性 (ロ)緊張性 (ハ)妄想性

(六)麻痺性癡呆

(七)老老性精神病

(八)虛脫性精神病(後天性神經衰弱症を含む)

(九)熱性染病性精神病

(一〇)中毒性精神病

(一一)偏執病

(一二)躁鬱病 (イ)發揚性 (ロ)鬱憂性 (ハ)定期性 (ニ)回歸性

(一三)ヒステリー性精神病

(一四)變質性精神異常(先天性神經衰弱症を含む)

八、合併症は其の病名及發生の時日を記載すべし

九、縁事上の關係は未婚者、妻帶者、離婚せし獨身者、配偶者の死亡せし獨身者に區分し結婚(數面に及べざるものは其の年月日及理由をも記す)離婚又は配偶者死亡したるものは其の時日を附記すべし

一〇、家計の狀況は戸主(家族)の直接國稅金額及家屋の有無記載すべし

一一、實際の狀況を實際を好まざる者、普通、好む者の三種に區分して記載すべし

一二、宗教欄には患者の屬する宗教の細名及其の信仰の有無並厚薄を記すべし

一三、養育欄には養育實父母なりや其の他ふりや及其の養育を寛、普通、嚴に區分して附記すべし

一四、教育欄には入營前修業したる學科程度を中學卒業以上及之と同等と認むる者、高等小學卒業及之と同等と認むる者、尋常小學卒業及之と同等と認むる者、稍讀書算術を爲し得る者、讀書算術を知らざる者に區分記入し且入營後の教育成績を不良、普通、良の三種に分ち併記すべし

すべし

一五、飲酒は飲用せざる者、時々飲用者、嘗て飲用せるも現時飲用せざる者に區分し且其の一日量(獨酌と對酌とを區別す)及品種を併記すべし喫煙も亦之に準ず

一六、遺傳的關係は三親等以内の血族に就き精神病、神經病、異常氣質、飲酒多量、自殺、犯罪の有無を調査し其の種類及其の者の患者に對する續柄を記入すべし

一七、身體的關係は主なる變質徵候、梅毒、主なる外傷、虛脫、急性傳染病、「ヒステリー」、癩癩、動脈硬化症及其の他精神病に對し必要なる事項を詳記すべし

一八、精神的關係は無刺戟、一時的刺戟、持續的刺戟に區別し刺戟は更に其の種類(例之は檢閱、親族間の不和、戸主との争等)を細記し尙此の區分に據る能はざるものは之を詳記し氣質習癖をも記載すべし

一九、社會的關係は入營の前後に分ち犯罪、懲罰及不良行爲に就き其の種類(果犯者にありては各別に)又は事情を記入し(窃盜にありては盜品の種類を記載す又高價ある品を盜みて信すべからざる低價にて賣却せりや等を記載す)又浮浪自殺企圖等あるものは其の回數及當時の模様を描ぐべし

●新博士の學位申請論文

去一月廿一日學位授與の新博士如左

一、明治三十五年京都市に於ける虎列拉流行に就て(日本文) 現京都醫科大學教授 賀屋 隆 吉氏

一、靜脈硬變症に就て(獨逸文)

一、コブラ毒のコンプレメント破壞作用に就て(獨逸文) (モールゲロート、賀屋隆吉共著)

一、「トキソレチチド」に就て(獨逸文)(同上)

一、脊椎動物「スパイナル、アミナル」に於ける「アスフィンキシア」に就て(英文)(スターリンゲ、賀屋隆吉共著)

一、組織内に於ける「フオフ、フオフロテン」分布の状態に就て(英文)(アリンマー、賀屋共著)

米國紐育ロツクフェーラ醫學研究所細菌部助手 野口英世氏

野口英世氏

一、蛇毒の血球に及ぼす保護作用に就ての研究(英文)

二、化學的作用により補體が非能働性となり又は再生することに就て(獨逸文)

三、蛇毒の「ヘリーゼ」「バクテリオリーゼ」及び毒性との關係に就て(英文)(シモン、フレキシナー、野口英世合著)

四、蛇毒及び蛇血清の構造(英文)(シモン、フレキシナー、野口英世合著)

大坂私立胃腸病院長 湯川玄洋氏

一、日本人生理的胃液の鹽酸量に就て(獨逸文)

二、日本人の胃酸過剩症に就て(獨逸文)

三、胃脈に對する「アドレナリン」作用の臨床並に實驗的研究(獨逸文)

四、純植物食を取る日本僧侶の營養に就て(獨逸文)

京都醫專藥學教授 藤谷功彦氏

一、人工胃液の消化力上に及ぼす各種物質の影響に就て(獨逸文)

二、人參の化學的及び藥物的研究追補(獨逸文)

三、樟腦酸の藥學的的研究追加(獨逸文)

四、血液粘度及び尿分泌に就て(獨逸文)

五、蛙胃の自發運動の検査法(獨逸文)(醫學博士森島庫太郎功彦共著)

六、除蟲粉の化學的及び藥學的的研究補(獨逸文)

七、剔出蛙胃に施せる二三の實驗(獨逸文)

●新博士 陸軍二等軍醫正醫學士山田弘倫(皮膚花柳病) 函館病院内科部長醫學士瀨尾雄三(内科)東京醫科大學助教須藤憲三(醫化學)私立佐野病院長醫學士佐野彪太(神經科)の四氏は去る三月一日文部省に於て醫學博士の學位を授與せられたり其論文左の如し

現陸軍二等軍醫正 陸軍省醫務局衛生課長 山田弘倫氏

一、日本に於ける白癬の研究(獨逸文及邦文)

一、安知必林疹に就て(邦文及獨逸文)

一、瘰癧息肉の病理補遺(獨逸文)

一、多發性蟹足腫に就て(邦文)

一、肘腺腫の多寡と其徵毒診斷上の價值(獨逸文)

一、疥癬療法附皮膚劑の新原料(邦文及獨逸文)

一、日本に於ける花柳病(邦文獨逸文)(山田弘倫、高橋真琴、石黒大介共著)

一、射創の後療法としての軟膏の價值に就て(獨逸文)

一、日本壯丁の癩病並に之を全國に於る病勢關係に就て(獨逸文)

現東京醫科大學助教 須藤憲三氏

一、有機物の原素分析に就て(獨逸文)

一、液體溫調節器に就て(獨逸文)

一、尿中に存する糖還元物質の臨床的定量法に就て(邦文)

一、グリコーゲルアイエルの消化法に基ける動物性液體の脂肪定量法に就て(獨逸文)(隈川宗雄、須藤憲三共著)

一、パネー氏の糖定量法に就て(獨逸文)(同上)

一、動物質中に存する脂肪及不酸化性體定量の新法、附最近專ら稱用せらるる二三定量法の評論(獨逸文)(同上)

現函館病院長 瀨尾雄三氏

現函館病院長 瀨尾雄三氏

一、細菌に因する馬尿酸の分解及尿中の安息香酸及グリコ、オキシ證明の價値に就て(獨文)

一、辟性糖尿病犬に脂肪血の發現並に血液及び肝臓に於けるリポイド量に就て(獨文)

一、筋運動の辟性糖尿に及ぼす影響に就て(獨文)

一、ヌクレイン酸と尿酸との化合物に就て(獨文)

一、眼球腫孔現象の三例に就て(邦文)

◎賀屋氏は、東大出身で、京大の助教授で洋行して来て、現に京大の教授である、

◎藤谷氏は、久しく京大薬物學の助手をしてゐて今は京都醫專の教諭なり

◎野口氏は、會津の人で、渡邊鼎氏が會陽醫院を設立して居られてた時の

藥局生である、廿五年頃、今の東京齒科醫學專門學校長血脇守之助氏が

同地へ漫遊した時、渡邊氏のところを知り合にあつて、其俊才を見込んで連

れて來たのである、血脇氏も田舎から書生を連れて來たは來た様のもの、自

分もやつ、齒科醫にあつたばかり書生の置きどころなどは勿論無い、そこ

で自分が幹事をしてゐた高山齒科醫學院の學僕にして使ふに似た、野口

君は、支那書もする雜巾がけもする、時間々に拍子木をたたいて廻る、

教場の世話をする、其の忙しい中で、せつせき前期の勉強をする傍ら英語

と獨逸語を自修したのである、英語は渡邊氏に多少教へられたのであるが、

獨逸語は、會津の中學校の教師とかにほんのアベツエを習つたばかりでア

トは獨逸學である、其の内に前期の試験に及第したもので、血脇君が心

配して、少し許濟生學舎へ通はせてやらうと云ふので、無げなしの自分の

月給の内からいくらか割いてやつて、七八ヶ月程下宿せさせて濟生學舎の

後期學科を聴講せしめたのであるが、さうくは出來ない云ふのでい、

かげんに切り上げて又た高山齒科醫學院に歸つて二三ヶ月勉強してゐる内

(内地雜報)

に試験を受けて後期の學説も實地も及第して仕舞つた、そこで或る人の世話で順天堂へ這入つて、雜誌の編輯やら進先生の外科各論の校正やらやつて、傍ら醫局の手傳ふどをしてゐたが、やがてバクテリオロジーをやつてみたいと云ふので、つでを求めて研究所の員外助手と云ふやうのものにしてもらつて、研究の傍ら今度は眞の獨逸學で、佛蘭西語を勉強し始めて夫れも一二年で大ぶん成功したやうであつた、そんなことをやつてゐる内に、米國のフレキシナー教授が、本國政府の命で比律賓群島へ調査に行く途中、東京へ立ち寄つて研究所へ參觀に行かれた際、英語が出来るところから案内に立つたが縁で懇意にあつて、亞米利加へ出かける話かついたのである、亞米利加行の話はついたが旅費などは一文も無い、やきもき煩悶してゐる内に、神奈川縣の検査醫になつて五六十圓の月給が取れることにあつた亞米利加行の旅費は残らぬ、然るに彼れの運の向いて來たのは例の營口のペストである、其の時彼れは露西亞政府の招聘に應じて検査に行くことにあつて、村田昇清氏の部下に屬して出かけたのだが、ペスト撲滅後露西亞の一般病院長として半年ばかり居残つて米國行きの旅費を貯へて歸つて來たのである、彼れに於て始めて宿昔の志を達して米國行を企てたのだが、彼れが斯く米國行を熱望したのは、蓋し金が有り餘つて學問に疎かる亞米利加へ出かけて彼の有る餘る金を利用して思ふが儘に研究してみたいと云ふ志願であつたのである。彼は旅費の外僅ばかりの小使錢を持つて米國へ出かけて、直ちにフレキシナーの許へ頼つて行つて、助手と云ふ名義でフレキシナーが數年前からやりつゝあつた蛇毒の研究を助けてゐたのである、フレキシナーが、數年苦心してやつても思ふ様ふ成績が出なかつた蛇毒の研究が、野口が行つてやつたところが、僅か半年ばかりでフレキシナーが考へてゐたより以上の成績が現れたので、フレキシナーも大に喜で早速連名で米國萬有學會の席上に報告したところが、非常の喝采を博して、此蛇毒の研究を繼續せしむる爲めに、萬有學會から野口君に一ヶ年二千弗

の研究費を贈るの決議が満場一致で成立して野口君は渡米後第一の面目を施したのである、其内にガアネギー氏が一千萬弗の大金を出して研究所を設立する事になり、フレキスナー氏が所長に聘せられたから、隨て野口氏も研究所の一員として入所して、間もなく歐羅巴へ留學を命ぜられて、主としてコッペンハーゲンに於て細菌學醫學等の研究に従事した後、獨逸佛英等を巡遊して米國へ歸り、今はロツクフェラー研究所病理部長として細育に居るのであるが、此間に、彼が、英獨佛等の國語を以て米國及歐羅巴で公にした論文は六十餘篇に達したので、昨年來五十篇ばかりを提出して學位を請求したのである、京都大學では、こんふに多くてはしやうが無いと云ふので、内四篇を選んで審査して、醫學博士の學位を授與するの學力充分なりと決定されたのである、

◎湯川氏は、京都醫學校出身で、郷里の紀州に開業してゐて、三十年頃か上京して、故長興男爵の門に入つて始めて消化機病專門さふつたので、其後獨逸へ留學して歸つて來て、大阪に病院を開て盛に流行らしてゐる事は皆ふ人の知つてゐる通りである、

* * * * *

醫校雜報

●新潟醫專の増員
新潟醫專教授九人を十四人に助教授三人を五人に書記四人を六人に増員せらるる他の醫專は藥學のあるは十八にして岡山

は十五名也(多くは一二名の缺員あり)左れば新潟も岡山と同じく十五名迄は増員せらるる事を得らる事勿論也、即ち現在の池原、澤田、富田(池田)菅沼、黒岩、藤田、川村、島田(本校二十九年卒業)、大島諸氏の外候補者たる布施、杉村、足立、宮路の諸氏悉く任命せらるるも十四人にして池原氏校長さふり教授は兼とふる者とすれば尙二名の餘裕あり十五名とすれば三名の餘裕あり此二名乃至三名は精神々經、小兒科、藥物、醫化學等の内にて追て撰定せらるるとさふるべし

●熊本醫專校建築工程

昨秋より文部省技師矢島工學士設計の下に工事中ある私立熊本醫學專門學校建築は目下既に其の大半を竣了せるが其の内縣立熊本病院構内に築造中ある衛生細菌學教室は既に工事落成し又病院接續地ある新買收地八千五百坪中に築造中ある解剖學教室、同附屬室、屍室、屍體貯藏庫、組織學實習等の各棟は三月中に略ぼ落成尙又引續き解剖學教室、本館生理病理等の教室は目下福岡滞在中ある石工學士の手許にて設計を急ぎ居れるが之が終了次第直ちに工事に着手すべし而して建築費の總豫算は既報の如く十萬圓あるが他學校とは建築を異にし一々各教室を別棟に爲すの必要あり旁々工事に手間取る模様なり全部の工事落成は本年末さふらんと云ふ

●宮城病院の落成

去る四十二年以來新築中の仙臺市宮城病院は、今回工事竣成し、六日を以て落成式を舉行すべき豫定の事は既記の如く、同院の敷地二萬坪建坪四千三百三十坪間敷約五百を有し患者六百名を收容するに足るべく總工費七十餘萬圓を算せり、而して本館は二階建にて階下に眼科、内科、婦人科、階上に小兒科、精神科、耳鼻咽喉科、皮膚病梅毒科の八診察室を設け其他外科手術室、婦人科手術室、内臟手術室重症室、浴室、洗面所、炊事場、裁縫室、消毒室等何れも最新式の裝置を爲せり、

就中婦人科手術室は山形博士の考案に係る獨逸式二重張、亞鉛板葺にて換氣塔は銅板張を爲し、避雷針を設け、外部に放熱器を据付けて室内を温め、又夜間の手術に備ふる爲め「フリフト」電燈及び反射鏡を以て五百燭の電光反射せしめ設備は間然する所なき立派なものなりと。

●臺北醫學學校の成績

同校は今日迄二百八十餘名の卒業者を出したるが、本年四月にも三十二名の卒業者を出す筈にして、是等卒業者は公醫さかり居れるあり、或は病院助手たるあり、或は開業せるありて何れも、臺灣の醫事衛生に従事しありて島外に出でしものは僅かに兩三名のみにして頗る好成績なるを以つて、本年は多少規模を擴張して五十名の生徒を收容すべしといふ。

●奉天醫學學校開校期

滿鐵により經營せらるる奉天醫學學校は、來九月より開校の豫定ありしをベスト驢ぎの爲め準備出來ず、多分明年度に延期せらるべしと傳へられたるが、河西博士は萬障を排して、來九月より開校する意氣込みにして、着々準備を急ぎつゝあり、教師の如きも解剖は東京醫科大學助手椎野醫學士及久保武氏（本校三十一年度卒業）生理は京都醫科大學助手久野氏、目下獨逸留學中の岩野氏、病理解剖は大阪高等醫學校教諭の村田宮吉氏と役割も決定し居れりといふ。學生は主として清國人を收容する筈なるも、場合によりては本邦人にも入學を許可すべく、又明年度には藥學校を開設する豫定にて夫々準備計畫中ある由。

●醫學專學校長會議

醫學專門學校長會議は去る四月十八日より文部省に於て開かれ其問題如左

一、修身教授ノ狀況

二、醫化學科加設ニ關スル準備

- 三、醫學科及藥學科ニ對スル經費分配關係
- 四、藥品工業學、機械學大意教授實況ノ狀況
- 五、入學者選抜試験ニ關スル件
- 六、無試験入學檢定實施成績
- 七、卒業試験科目分割施行ニ關スル意見(宿題)

* * * * *

外國雜誌報

●獨逸の醫師數

近時シユルベ教授の發表せる所に據れば、現今獨逸に於ける醫師數は、三萬二千四百四十九人にして、昨年比し四百八十八人を増加せり、而て人口一萬に對し、醫師五、〇一の割合に當り、此の點よりせば前年及び前々年度に於て五、〇二及び五、〇六ありしより減少せる事となる、但し醫師の増加は、近き將來に於て、豫期せらるる所に於て、醫學生の數は一九〇五年に於ける六千〇三十二人より、一九一〇年に至り、急に一萬一千二百二十五人に増加せるを以て知る可し然れども此の内獨逸に於て開業する事なき外國醫學生をも含有するものあり、獨逸全土を通じ醫士の份佈は、近年平等に増加せる所あるも、尙ほ大都に開業するもの多く、前年開業せる四百八十名の醫師中三百二十九名は、人口百萬以上の大都會に業務を開き現在醫師三萬二千四百四十九名中一萬三千二百六十一名は、此等大都會の地に開業し、此等大都會の住民一萬に對し醫師九、

八五の割合にあり（但し伯林は一二、三二の割合あり）、而して一面小都會及び田舎に於ては住民一萬に對し醫師三、七四の比例を示す、殊に此等の大都會中「ウイースバーデン」は溫泉場及び保養地たるを以て醫師の數量も多く、即ち人民一萬に對し二二、六の割合あり、次に多きは民顯にして人口一萬に對し醫師一六、六の比例に當れり。

獨逸に於ける女醫は一九〇八年には五十五名ありしに、(本邦には三百二十餘名)、一九〇九年には六十九名に増加し、現今は百〇二名の女醫ある由、此の内實に三十二名は伯林に開業せるものありし而して女醫學生に就きては、現今五百十二名ありて、前年より約百五十名を増加せり。

各専門醫の数は、一九〇六年に於て六千二百五十八名、即ち、全醫師の二〇、二%なりしも、一九一〇には七千二百七十二名即ち、全醫師の二二、四%に増加せり。而して此等専門醫の内、最も多數を占むるは婦人科専門醫にして、次に眼科第三位を耳鼻咽喉科あり。因みに大都會中専門醫の最も多きは「ドレスデン」にして、當市醫師の四四、二%以上は専門醫あり。

● 奥國々立母兒保育研究所

曩に奧太利皇帝陛下には第八十回天長節に當り、本祝賀に要する金子を以て小兒の爲めに作用せんとの志を抱かせられ此の旨國內に發表せらるゝや、直ちに金子の集まるもの多く、

今回夫れにより奥國國立母兒保育研究所 Reichsanstalt für Mutter und Säuglingsfürsorge を設立せられたり、而して皇帝自ら本研究所の保護者たるを諸せられ、奥國高官亦た此れを委員に任ず、該研究所の組織は種々にして、第一は各縣病院より二名の看護婦を送り、此等に對し各々級を分ち三ヶ月乃至六ヶ月に亘り乳兒に關する總ての知識を授け、講習を終りたるものは各自の病院に歸り、此所に於て充分已得の技能を發揮するものにして、亦た助産婦も若き母及び初生兒に最も關係深きものなるを以て前者と同一の教習を受け得る者とす。第二は特別に乳兒看護婦を養成する

に有り。第三は醫師にして健康兒保育法を研究せんとするもの、及他日各地方に開設せらるゝ可き本研究所分院の長たるに適する人物養成にあり、第四には婦人に小兒養育法を教ふる級を設け、此れに關連し一定の日を定め所謂「相談日」なるもの設け、母は其の子を伴ふて本研究所に來り各自其の兒の保育法及び病氣の手當等を教授さるゝものにして、尙最後に注目す可きは、附屬として、道德上、精神上、乃至肉體上の欠損を有する若年者を收容し、此所に於て一定の教育を授け殊に意を用ひたるは低能兒に對し特別に注意を拂ふにあり、而て本研究所には夫れ々々の専門教師、醫士、看護婦を設置せり。

* * * * *

校内雜報

● 柔道大會記事 (二月二十六日)

世の中でグナノ、した者程厄介なる者は無い、働く様か働かぬ様な人間は死んで仕舞つた方がいゝ、此様な人間の出来るのはつまり精神の修養がないからぢや、修養さへして居れば立派な堂々たる者になれる。だから修養の無いものは聖賢の傳でも何でも讀んでドシ／＼膽ツ玉を練つて練つて練つて置け。

然しながら我輩は敢て血氣盛んか諸君には特に聖賢の書よりも武術を以て膽力を養成する様に薦める。昔しの間で英雄豪傑と呼ばれて天ッ晴れ男

の氣前を見せた者は何より第一に膽力が確つかり座つて居つたからぢや、
あゝ膽力！膽力！何たる氣持のいゝ響ぢやないか。

其處で愈々本文に移るが我輩は青年たる諸君に特に奨勵の言葉を以て薦めたいのは手前味増でも何んでも御座らぬ此の柔道をウンス遣つて置けと云ふことだ。一体武道と云ふものは之れ實に一種の精神である、語を換つて云ふたら柔道の中にも精神の宿つて居ると云ふのだ。當今稍もすれば武に疎くして文弱に流れるのは社會の風潮の爲めさば云へ痛恨に堪ぬ次第である。

我が柔道部は實に之等カナ／＼主義より超然して天に嘯いて居るのだがナ／＼精神の者共が目廻はす程活動して居ると云ふ事は特筆大書すべき價値が充分あらうと思ふ。柔道は單に突嗟の場合に危難に遭遇した時に身を處する事が出来る許りぢや無く忍耐、膽力、不恐、作戦の有難い賜物が之に附隨して居るのだ、だから柔道撰手には大なる自信がある、此の自信の發現は平生にても見られるが大會は發現の發現を示すものだ。本校の大會は二月廿六日濟々堂にて開かれた、氣骨稜々たる撰手等は腕にれぢを掛け勇を鼓して出場した、その雄々しさ！見事さ！觀客一同鳴りを靜めて熱視し神嚴の氣宇場に溢るゝを覺はしめた。就中藤田研二、長外喜雄氏等の居捕、池上豊、中林清右衛門氏等の立合の如きは何れも呀ツとして其の妙特に恍惚とし汚す可からざる中に無言の大なる教訓を一般の腦裏に深く刻ました、我輩の特に感歎なく能はざりしものは撰手等が全く勝敗を度外視して熱心に忠實に眞面目に外來撰手と仕合した一事である。(T、N生)

●對一中校野球試合

(三月二十九日)

本校對第一中學野球試合は去る三月二十九日午後三時から四高グラウンドに於て千家氏審判の下に舉行された。恰もむら消いてあつた雪も解け去つて

(校内雜報)

花の蕾もこゝ一句さ云ふ季節である、加ふるに天氣は珍らしく日本晴れさ來て居る小粒大粒の見物者は忽ち場内を埋める。彼れ一中は昨春來幾度か我に會稽の耻を雪がうさして成らず、近く昨秋近縣の豪の者高岡中學を粉碎し其餘勢を驅つて我に當つて來たのである、て撰手應援の鼻息が頗る荒い、我も過日來再度四高との練習試合の功を積んでいてやまた一揉みと云ふ氣概で應戰する、試合は我の攻撃によりて序幕を開かれ第一回の一点に對し彼亦危く一点を収め得たが二回我が伊藤の美事ある安全打は堀田を生還せしめ我れ二点、然るに彼は相續いて我が西川投手に醜弄せられ空しく三回に入る、我は岩田、加藤共に四球に入り宮田續いて熱球を遊撃に飛して壘上の人とあるや敵の狼狽目も當てられず易々として三点を占め茲に我軍五点さふる、次で代つて彼の攻撃となつたが陣勢舉からず得点ヌール、大勢並に決する、四回我は四岡生き彼は全死、第五回我は四球に入る高倉は堀田が大安打に依つて生き堀田は江龍の犠牲球を頂戴して生還。その間に伊藤四球を利して長大の軀を提げて一氣に本壘へ突入し我れこゝに九点代つた彼は四球に入る山本鷹の標か目をして本壘をうかゞつて居たが我が高倉から加藤へ投じた球は危ぶい處で逸して遂に一点を與へる、敵軍こゝに狂喜。第六回珍らしく我に得点なく調子に乗つた彼は、盛んに遊撃三壘へボンと打込んで米谷以下満壘さふる、スワこそ應援は血を吐く許りに彌次りまくり俄に活氣立つて來る、此時殘念乍ら我に續いてミスがあつた爲め三点を御馳走して丁う七回は最終戦である緊襪一番西川四球に入り高倉フライに空しく敵に名をかさせ堀田の熱打遊撃の設問を掠め長驅して西川と共に生還。伊藤痛快ふる大飛球を雲中に打込んだが敵の中堅三木嵐走してハツシと受け止める敵乍ら立派な出來ばへである。彼れ代るや應援の號叫一際盛んに大に爲す有らんとしたが松川の生還を名残りとし續いた三人は見事投手西川の微笑のうちに葬られて、ゲームセット、我の十一一点に對し彼は六點、桂冠は依然として我のものであつた。今左に當日の成績を

(校內雜報)

擧げよう。

本校軍

中左右捕遊投三二一
堅翼手擊手壘壘
江西岩加宮西高畑伊
龍岡田藤内川倉田藤

捕左三二一中投遊右
手翼壘壘壘壘手擊翼
山安松米松三下敵
本藤川谷井木村

打	數	3	2	3	1	4	2	3	3	3	
得	点	0	1	2	1	1	1	3	1	3	
安	打	1	1	1	0	0	0	1	1	1	
三	振	1	1	0	1	0	0	0	0	0	
四	球	1	1	2	2	0	1	1	1	1	
犠	牲	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
三壘	打										
死球	下村二										
	(西川一)										
	殘壘(醫專七)										
	(一中四)										
三壘	打	伊藤一、	二壘	打	堀田一、						
二壘	打	堀田一、									
一壘	打	堀田一、									
捕	手	藤川谷	井木村								
投	手	川谷	井木村								
遊	撃	井木村	谷川								
右	手	井木村	谷川								
左	手	井木村	谷川								
三	壘	井木村	谷川								
二	壘	井木村	谷川								
一	壘	井木村	谷川								
打	者	井木村	谷川								
		井木村	谷川								
		井木村	谷川								
		井木村	谷川								
		井木村	谷川								
		井木村	谷川								
		井木村	谷川								
		井木村	谷川								
		井木村	谷川								
		井木村	谷川								
		井木村	谷川								

●十全會東京支部發會

(四月二日)

在東京本校出身者は從來一圓會なる會名の下に随時開催、時事を談し、學術を論じ本校関係者間の親睦を圖りつゝありしが、本月上旬各科學會總會參列の爲め本校關係諸士の上方を機とし一圓會を十全會東京支部會と改め四月二日午後五時より本郷湯島魚十樓に於て發會式を舉行せり、同日は高安會長、木村博士、野田忠廣氏、松原博士、駿波重次郎氏、島田吉三郎氏を始めとして在野の會員約七十名の多數に達せり會するもの悉く是同窓の友舊情温かして心事濃く、あり定刻に達するや竹中繁次郎氏會の設立を説き次で會則を議し満場異議なく原案通りに可決し一二訂正を加へたるのみ、やがて酒肴は運ばれ盃は配かれ美女酒席を賑はして興の盡くるを知らず、酔ふては何時しか學生の昔に歸りて隔てなく云ふべからざるの情

誼場に溢れ都土俗塵の地化して仙境の概あらしむ宴半げにして一同起立、木村博士の發聲につれて本會の萬歳を三唱し乾盃亦乾盃前途の祝福をなし散會せしは午後十一時頃ふりき會則及詳細の記事は東都の會員より改めて報道ある筈、尙ほ本會員にして出京せらる時は本郷春木町江波知輝氏宛一報あれば支部に於て出來得る限りの利便を與ふる由。(福生)

●本會員の日本醫學會出演者

去る四月一日より約一週日に渡り東京帝國大學内に於て開催せられし各學會に出演せられたる本會員及演題は左の如し。

- 眼 科 學 會
 - 一、特發性角膜脂肪變性に就て 醫學博士 高安右人氏
 - 一、上眼瞼睫毛倒生症及内瞼疝手術に就て(未済) 片山真作氏
- 外 科 學 會
 - 一、硫酸銅棒の殺菌力に就て(時間の都合未演) 館保二氏
 - 一、腰髓麻痺の百餘例に就て(未済) 伊藤哲一氏
- 皮 膚 病 學 會
 - 一、一二の濕疹療法に就て 笹岡芳名氏
 - 一、圓形禿髮症及完全禿髮症に就て并に一療法 同氏
 - 一、結節裂毛症の一例 同氏
- 耳 鼻 咽 喉 科 學 會
 - 一、瘰癧性咽頭炎の三治療 濱地藤太郎氏
 - 一、耳鼻咽喉領域に於ける手術後療法に就て 同氏
- 衛 生 學 會
 - 一、食品の營養價及錢價に就て 北豊吉氏

内科會

- 一、所謂脾癆の症狀に就て 岡本京太郎氏
- 一、肺氣腫(動物試験)に就て ドクトル 竹中繁次郎氏

神經學會

- 一、早發痲病の本態 醫學博士 松原三郎氏
- 一、黴菌に因する中樞神經の變化(未済) 同 氏

- 一、神經衰弱症の循環器系統に及ぼす影況 福田美明氏

- 一、持續浴と体重との關係 石川精一氏

- 解剖學會

- 一、學名語協定の希望 石川喜直氏

- 一、日本産大鰐魚の脊髓軟膜に於ける特殊の鞅帶 島田吉三郎氏

小兒學會

- 一、再び米粉營養養兒に來る病的變狀に就て 岡本京太郎氏

* * * * *

漫 録

高木琢磨君逝く

中村欣一郎

嗚呼明治四十四年の春、そも何等の不幸ぞや、先に學兄小原芳雄の君、九泉の旅に上つて、永へに歸らず、次いで、同窓生猪飼君、斃れたりとの報

に耳を驚ろかし、今亦昨日まで哀樂を共にしたる學友、高木琢磨君の永眠を傳ふるに至らんとは。

人生は泡沫夢現の如し、人は形骸に死して、聲名に生き度き者とは志士の言あり、されど君の如きは、蛟龍の遂に雲を得ずして、池中に没し去りたるの類か、學を卒へて僅に四星霜、業を開いて僅々六ヶ月、君が計畫稍其端緒を開かんとするの時にあたり、天遂に壽をかきす、衆人の囑望と渴仰さを捨て、漂然去つて白玉樓中の人に歸せんとは、吁。

君が半生は實に苦闘の生活ありき、君が頭腦の明敏、君が感情の熱烈、君が思潮の波瀾、等は蓋し此苦闘の反動に過ぎざりしなり、斯るが故に君は、理性の人に非して感情の人ありき、平凡の人に非して活動の人なりき、宜かふ哉、君人に接する其温謙にして、一度高岡の地に門口を開くや、忽ち患者の信頼を受け、門前常に市をふしたりと聞く、誠に遇然に非る也。

君本春肺炎を患ひて幕中の人さふる、多感の君は正に悶々の情禁す可からざる者あり、嘗て君の病を見舞はんが爲め、恩師上田教授と共に訪れたる時、君欣然として余の手を握り語つて曰く『知己親友少なき異域に於て、斯かる疾患に罹り、語るに友無く、前途を顧慮せば一片の不安無き能はず、今親しく恩師併に君が見舞を受く、正に百萬の味方を得たる心持す』と言辭悉く君が肺肝より吐露せるものありき。

而して君の病症は、初め肺炎の診を付せられたりも、中途瘵扶斯の疑ありとの報あり、されど余が恩師と共に、君を見舞ひたる當時の症狀は、窳扶私として解す可からざる点あり、君の糞便と君の血液とを以て行ひたる細菌検査は陰性に終り、症狀亦漸次輕減し人々始めて憂色を去る而かも此輕減は吾等をあざむく假面に過ぎざりしからんとは即三月十七日の朝病寤は遂に猛然逼つて腸出血を來さしむる事兩三回君眼閃んで舌動かず二十有七年の春秋を一期として靈魂遂に天に歸す、吁、嗚呼高木琢磨君逝く。君苦闘の辛酸をなめ盡して逝げり。君が遠逝は正に悲む可し、然れ共余は

愚智の繰言を述べざるなり。君嘗て人生觀を語つて曰く、『人生は紙片の表裏の如く、生は表にして、死は裏からんか。表裏相待つて、紙片全きを得、生死相待つて、人生の意義目的を全ふす可し。人は此意義、此目的を、全ふせんが爲めに生れ、意義目的を全ふして後、正に死す可き也。而して吾人各の職業は、此紙片を全ふせしむる、骨子に過ず、勉めて怠らずんば即足る』と君今や忽然表を去つて裏の人とある、事理甚悲む可きも、うは只皮想觀察のみ、嗚呼、君が二十有七年の、活動ある生涯は豈短しと言はんや。君が平素の覺悟にして動ぜずんば、何を苦しんでか眠せん、謹で申す、

附記

學友高木琢磨君、急頓の死を遂げ、生前君の病床を見舞ひし者、等しく其診に迷ふ。中途腸チブスの疑診付せられたり雖も、疾病經過の全般を通して案ずるに、其チブスに非る事を想はしむ。然らば本態は何者ぞ、一種の血液病？、新生物？、是實に余等の等しく、君が遺骸の解剖を欲したる所以あり、然るに君幸に臨終に際し、解屍の事を遺族に託し、遺族亦進んで余等に是を乞はる、然るに高岡警察署長に、瀧武次郎ある人あり、一度許可の内命を與へながら、遠く金澤より半日の公職を抛つて、特に執刀す可く來られたる、上田、宮田、石川、の諸先生及び、丸山學兄の揃はるるに及んで、時遅れたりとの主張にて、言を左右に托し、曖昧朦朧として、遂に許可書を與へず、其慢にして不親切ある態度、殆んど言語に絶す、如斯して君が死因に疑團の中に包まれて、煙と共にな化し去りぬ。嗚呼止むる哉。區々たる一官吏の誤解は、引ひて醫界重大の研究問題を煙滅せしむるに至らんとは、惜みても尙餘りありと云う可し、結筆に際し、高木君生前の主治醫官稻吉氏より、親しく余に寄せられたる、病床日誌を掲げて、讀者の明敏ある頭腦に訴へんと欲す。

病床日誌

- 前略
- 二月十日 夜十時劇しき腹痛、莫比牛筒注射、約三十分の後嘔吐、吐後痛み緩解、安眠。
 - 十一日 午前七時体温三十八度九分、軽度の悪寒、午後四時下降七度二分、右下腹痛輕微にあり、局部には抗低硬結等を觸れず、便通なし。
 - 十二日、十三日 略す、熱は八度以下に降らず
 - 十四日 午前三時頃よりや、劇しき悪寒、次いで九度九分の熱、全十一時に至り八度二分さる。此日他覺的に、左胸後下方に於て抗低、呼吸音微弱、右下腹痛同狀あり、(肺炎の疑を置く)。
 - 十六日 午前十一時七分一分にて、午後三時、悪寒後八度八分に昇る。他覺的に、右胸の變化者明さふり、打診上短調、芥子泥を貼し、後ち氷菴包を施す。
 - 十七日 此日より輕微の咳、咯痰あり、午前六時八度九分、次いで九度さる、右下腹痛微然たり、鉢動に依り右胸にも鈍痛を發す、咯痰中肺炎菌を認む、洗腸。
 - 十八日 午後より熱稍下つて八度、他は同狀あり。
 - 十九日 鉢温又々下降し最高七度七分、前日來体温に比し脈數少きを以つて、念の爲め發泡膏を貼し、ウサダール反應を驗する事さす、但しロセオラ、脾腫等を認めず。
 - 二十日 反應陰性、熱最高八度二分。
 - 二十一日より二十五日、まで一般に鉢温低く、七度五六分より、七度一二分の間にあり、他に變化なし、氷器包を去り溫濕布を加ふ。
 - 二十六日 夜十二時鉢温七度七分さる。
 - 二十七日 更に昇騰、最高午後四時八度一分、而かも胸部は、他覺的に輕快の狀あり、咳、痰、も減少。
 - 二十八日 午前十時、急に降り六度五分さなり、午後七度九分さる、

胸痛減じたるも、右下腹痛尙存在。

三月一日より四日に至る間微熱尙存す。

四日 朝間六度代にして、夜十一時七度九分とある、更らに發泡膏を貼す。胸部の變常消失せるにも不關微熱あり、而かも熱温に比し、脉數少きを以て也。

五日 午前五時頃より、全身違和の感、且腹内に不快感あり、全六時頃より切りに惡寒、次いで右下腹に劇痛を感し、俄然腸出血(テール便)あり、約百グラム位。

發病以來食慾は寧ろ充進の傾ありしが、出血を見るに至り、絶食、絶對的安靜、ポンペロン注射、脉性良かりしを以て、食鹽水の注入は行はず。右下腹に氷嚢、服藥中に阿片を加ふ、念の爲めカンフル注射。此日、午前九時より、熱温昇騰、午後三時九度とある、ウヰダール反應、陰性。

六日 午前無熱、夜十一時、昇騰八度五分とある、此夜、金澤より、櫻木病院長上田先生、醫員中村氏と共に來診、結果氷嚢包を去り、熱嚢包、カンフル不必要、絶食は無益、寧ろ少量の重湯、スープを准奨せらる、且服藥中の阿片を、去る可きことを命ぜらる。席上、越野、佐崎、の両君あり(中村曰、余は此時血便併に、直接肛門より採取したる、糞便の一部を以つて、不取致遠藤氏フクシン寒天平板に、培養を試む)。

七日 朝上田先生再診、更らに大便と血液とを、試験材料として取り、歸澤、此日熱最高八度三分。合議の上窒扶疑疑似症として、口頭を以て届出を了す。

八日 此日朝來、又々右下腹痛に次いで、中量の腸出血あり。金澤よりの報導に依れば、試験の成績は凡て陰性、チアスを否定するも佳かりき。

(中村曰、糞便培養に於ては遠藤氏フクシン寒天平板九枚に於て、一個の疑菌コロニーをも發見する能はず。

血液培養試験に於ては、コロニーの發生を認めず、一方採集したる血液

を、遠心沈澱器にかけ、血漿を分離せしめ、三種のチアス菌を以て、凝集反蔴試験を行ひたるも、成績は總て陰性かりき)

死も角も、上田先生の意志に反するも、局部に氷嚢を貼し、絶食を命ず(鳩首して、オビウムを與へんことを議る)(越野、佐崎、阿若立會)患者の脉性は良。

九日 熱温七度四五、分の間にあり、此日櫻木病院より、福岡君來診、再度便と血液とを取つて歸る。

十日 此日、『腸チアス疑似患者轉症届』を提出す。其摘考如下『前略す……患者に就き細菌學的検査をふせしに、總ての成績陰性にして、全然チアスに非ず、別種の疾患あることを、證明し得たり、試験は總て櫻木病院に於て執行云々』

福岡君より、試験の成績、前回と同様、陰性なりしことを通知し來る。十二日 熱最高三十七度。此日某縣醫出張、排便を要求したりと雖も、腸蠕動を制止しある場合なれば、出血を恐れて、浣腸を拒絶す。

十三日、十四日 無熱、氣分快爽食慾振ふ、自然便通あり、陳久ふるブルートを混す。

十五日 無熱一般の状態益々佳良、患者自ら余に告げて曰く、最早一日も、元氣回復の感あり、君の來診を煩はずの要もけん、若し異常あらば、重れてお願せん、と。爲めに十六日は訪問せず、然るに、十七日の朝急變あり。

十七日 前夜來、下腹に不快感あり、午前六時頃より、又々右下腹に疼痛不快感あり、患者自ら看護婦を指揮し、莫比一筒注射、此時惡寒熱發あり、暫時にして下る、次いで九時、中等量の腸出血あり、此時更らに疼痛の爲め、自ら莫比一筒注射、九時三十分、又少量の出血、正午十二時頃、續いて大量の出血來る、此時初めて、余の診察所に案内あり、倉皇

赴き見れば、既に脉指頭に觸れず、ポンペロン、ザガーレン等、取致す

注射す、次いで越野君来る、二人協力して、大量の食鹽水注入を行ひ、
 脉稍現はる、四肢尖端を温包し、更らにカンフル注射數回、此間腹鳴盛
 んに起り、同時に小量宛の下血數回、十二時半頃より、脉次第に細り心
 音幽微さる、更らにチカーレン注射を試みたるも、事茲に至つては、
 何等の効なく、言語不明瞭さなり、次いでシヤイチストツク現象、午後
 一時十分終に易簀す。
 君が病症の經過は大略右の如し。余は此處に衷心、主治醫君の、美しき
 御同情さ、警務の傍ら、斯かる細やかなる經過録をもして送り給はりし
 御好意さを深く感謝するものなり。
 (中村生稿)

● 弔猪飼善助君

中村欣一郎

北越の天地悲風慘たり、時維明治四十四年春一月二十一日、學友猪飼善助
 君、忽然として白雲の中にかくれぬ、嗚呼悲哉。

君は去る明治三十六年、笈を荷ふて北越より來り、爾來四星霜、誠に全級
 中綵々たる勉強家なりき、而かも其明快なる辨辨は、稀なる天才として、
 衆生の敬服せし處、嘗て陸軍々醫依托生として、既に在學中其身を軍籍に
 置きし程、頑健の体格を有したりき。然り而して此健康に、此學に此快辨
 さを兼ね備ふ、君は前途洋々として春海の如しとは、等しく君を賛するの
 言葉なりき。

非るに天遂に君が幸運を惡みたるものか、明治三十九年、君は不幸にも脊
 椎カリエスの診を受け、前途の光明たちどころに消失し四十年學を卒ゆる
 や、萬感を抑へ、燃ゆるが如き希望を抛ち、暗涙を飲んで洞里大積の野に
 隠る。思ふに當時君が精神上に破りたる犬打撃は、死刑の宣告もたゞふら
 ざるし者ありしからんか、爾來亦として其音に接せず。本春卒然悲報來つ

て君の易簀を傳ふ、事信せんとして信する能はず、君が潑灑たる風姿、君
 が明快の辨辨、今尙眼前に閃き、瓦底に存す。而かも今君が病床日誌を讀
 むに及んで、始めて君が恐る可き臆胸の手に磨きありしを知る、即君再び
 立つ能はざりしあり、而かも君は其再び立つ能はざるを知つて、死後解体
 の事迄も其が日誌に書き残さる。人生の悲惨はより大なるはふし。遮漫君
 が臨終の希望は悉くいられ、其遺骸は解剖に附せられたりき聞く、即君
 安らかに瞑す可きあり、大檀塚端君が一基の墓標ある處松風永へに颯々と
 して、君が歴史を語らん謹んで弔す。

死 生 餘 録

是君が病苦を押し、病骨を振つて、書き連れたる病床日誌あり。其終言に
 曰く

『題して死生録と云ふ、所謂生と死との間に生きて、過去の追想と、現在の
 志想と、未來の信念とを、思出の儘に云々……死後の遺言たる可く、生
 時の記念たる可し』と。君が臆胸の診を受け、惡寒と、熱と、脱汗と、
 日々衰弱し行く手足を眺めては、刻々逼り來る死の問題を顧慮し、始めは
 撮促として、是が手を逃れんと欲し、遂に離る可からざるを知つて後、從
 容として是が手に、運命を一任したる迄の感想歷々として紙面に活潑す、
 即故人正岡子規の子規隨筆、中江兆民の一年有半、近藤常次郎學士の仰臥
 三年に類す者たり、但し君は文學者に非ず、故に敢て文書上の修飾を願
 慮せざるなり、されど言々辭句悉く其肺汗を吐露したるもの、確かに一讀
 の價值を有す、即紙面の一隅を借つて、數節を披擧し、故人の感想を披歷
 する事然り。

君が始めて臆胸の診を受けたる當時の日記に曰く。
 ▲『吾は今迄死を考へる度毎に、何となく遙か遠方に是を望み、精氣がし
 た、即前途尙生の幾分を考へる餘地があつた。然るに今は、嗚呼今は、心
 中更らに寂寞を感じず居られやうか』(五月八日の一節)

▲『幼!!! 昨夜半と云ふに、フト眼を醒すに非常に蒸し暑い、全身發汗して衣服はシツボリさふり、ランプの火影淡ふ室を照して、父は側に何知らぬ顔に眠つて居らるゝ。四隣寂として、田に鳴の蝶の聲喧しい。』

我は餘り暑いので、眞裸体になつて、床に横つた。此時フト我眼前に骸骨の横はるのを見た、是を見よ、手を見よ枯瘦骨立して、骨のみを見る可きに、淡き光は彼をして、益々蒼白うふらしめ、最早此世の人さと思へぬのである。吾は此幼影が、自分の肉体であることを知つた時には、如何にも淋しい心持がした、そして今は早や夢幼だにも思もよらぬ、往時の肥満を戀しく思ふた。(五月十日の一節)

▲『此數日間は咳出そ出づれ、吾には比較的安樂の日ありき。例へば大風雨後の小晴の如きや、然り必ず然らん、或は死前に一度あるてふ小安靜おらんか。されど吾は思ひぬ、數日前より始めし、神効ありてふ佐多氏粉狀「ツベルクリン」の效果おらんか。』

嗚呼度し難きは吾心ふり、何人の眼より見、何人の心に考ふるも、數病併發せる此類死体の、おどて蘇生することのある可きや、殆んど火を見るよりも明かり、然るに未練なる哉、聴かしい哉、稍安靜なれば直に再生を希ひ、諸現の空想に眩惑せられんとす……………。(五月十四日の一節)

▲『此間古本箱を掃除して、病床餘録ある手帳を得た、こは嘗て發病當時、鉛筆で走り書きした、覺へ書きである。試に讀んで見ると仲々面白い、殊に自分の思想が年々共に變じ行く様が見へる様である。先づ發病當時の狼狽が詳しく書いてある。『希くは吾に速死を與へよ』おど書きしてある。其當時は頻りに、精神界おど云ふ雄誌を見て居つたので、信仰は全然他力信であつた、然し遂に絶對の阿彌陀如來を見出す事が出来おかつたのである。其後心が少し冷靜にかるゝ、今度は天人論や禪に關した書物を讀んだので、自然自力信に傾いて來た、所が身体か何うか、うかう自由か問は、それで安心したが、昨年來病苦を感じ、暗黒な前途を思ふにつけ、頻りに自

(漫 錄)

力を以て、精神の安靜を得様とするけれ共、實に困難である、何さおく不安で耐へられぬ事が多かつた。所が四五月頃から、何ふしても死なればおらぬと覺悟する段になつて見ると、『死は歸するなり』さか『死は天地も同化するなり』位では安心が出来ぬ。若し出来得るならば、死後は現世より以上おふ少くとも現世位の幸福お所に生れ度いと思ふのは人情である、若し直に阿彌陀佛の如く、偉大なる、宇宙の上に超然たる至大至高の人格に依つて、衆生が救はるゝものならば、其御袖にすがつて、生死の苦痛から脱し度いと云ふのは、生あるもの、等しく望む處であらふ。吾は自力信に依つて救はるゝには餘りに弱いものであつた。例へば慢性の病氣に憐める患者が、甲醫より乙醫と次第に醫師の交換をして、結局又再初の醫師の處へもどつて來る様おものである。云々 (十月二十日一節)

▲『吾、日而脚坐骨神經痛の苦みに耐へず、眠るに臨んで多量の麻酔劑を服用す。刻一刻身は麻睡に陥入りつゝあり、全身何んさ無く無力を覺へ、痛次第に弱く、瞼目一番すれば、身空間に浮んで、何處にか、持行かるゝの感あり、既にして頭腦却つて明拆にして、眠らんとして能はず、全身一の苦痛あるおく、吾身の存在を忘れしむ、吾以爲極樂の境、亦正に然る可し。』

死を解決す如斯の境なる可しと、再び瞼目して靜かに死を思へば、身既に死境にあるを覺ゆ……………中略。

吾は只何さおく安心せり、死を樂むに至りぬ、何が爲ぞ、吾は必ず死後の樂しきを自覺せし爲めおらん、死はやがて生ある可き様に信じたる爲めおらん、斯くて吾は吾思想の上に、大轉化を自覺したると共に、信仰の上に一步を進めたるを感謝せり。即心頓に安らきさふり、やがて樂しき眠に入れり。(十一月十日の一節)

▲『吾が信仰おく、さるる自白』人は死後必ず現世以上の美はしき樂境に生る可き者である、所謂極樂淨土を信じ度い、黄金の池、銀の樹林に瑠璃の果實、百鳥四時に太平を嘔歌し、無量壽佛さおつて、蓮華臺上に天人の奏樂を聽

き舞を見るの處、否々吾が死後の極樂は矢張現世の様であれかしと思ふ美しい事も現世の如く四時の變化し現世の如く、生活の困難も現世の如く、生存競争の劇烈なる点も現世の如かれ、要するに吾は未だ現世以上の樂境を見た事もなければ考へた事も無いのだ、吾は此儘で宜敷い何卒永久健善であり度い健善なれば困苦もいさはず苦勞も敢て辭さふ、が今の様に自分で自分の身体を自由に動かす事さへ出来ぬ様では何處に生存の愉快があるであらうか、然り此状態から脱するには必ず死か、ければならん云ふならば余は寧ろ死に依つて救はれ度い、而して更に再生し得くんば矢張り現世の様か所へ生れ度いと思ふ。希くば一日も早く、目下の木隅に等しき状態を脱して、死に依つて早く活動の世界に移住し度いものだ、見よ世界の万物は皆活動して居るであいか、活動せざるものは生存を許されぬのである。(十一月十七日の一節)

痰壺の感、痰壺の美しふ洗はれて、枕邊に飾られたる一種の美觀なる、是に水少し盛りて、大ふる痰カツと許りに吐き出せば、パツパツ現はるる水面の月、海月の浮めるにさも似たる、四つ五つ位までは田毎の月とも洒落たれど、次第に咽苦し吐出すにつれて、水一面泡立てば、いさゞ嫌氣のさして、之は病原菌の巢窟かと思へば、きたかしたもきたかした。

▲吾初めて已が重患を知り又起つ能はざるを自覺せる時吾は天を怨みぬ、人をのろひぬ、天地壞滅を望みし事あり、今にして思へば實に愚も極まれりさ云ふ可し、他の人患を得て吾何の益する處ぞ、天地壞滅して生物絶滅せば、以て吾苦痛を免れ得可きか。吾今死に願して、ひたすら人類の幸福を希ふの他意なし云々。

▲吾健なりし頃老人かどの『何某は死したうだが羨しい事だ』と、つぶやけるを聞きて思へらく、是直情に非ず虚言あり、人生れて此世に活く、誰か死を羨むものあらんぞ。吾今茲に大患を得て苦痛頻りに至る、而かも前途只一の活路も無く、一日の生存は一日の苦惱を増すのみ、頃日從姉某忽

焉として、殆んど苦痛無く永逝せりと聞く、直に衷心より彼女の死を羨むに至りぬ、依つて思ふ老人の言遂に虚言ならざりしな。(以上三件月日不明)

▲昨日は非常に淋しい日であつた、今迄も斯ふ云ふ経験は數回ある、其淋しさは神秘的で、唯わけも無く淋しい、大聲をあげて啼き度い心持がする。此淋しきは父母兄弟の愛や、醫師の信用、他人の親切、如何なるものをしても慰むる事が出来ぬ、實に死の淋しさである、親兄弟多くの知己に別れて吾一人何故に死せざる可からざるか云ふ淋しさだ。吾は淋しさの起る毎に吾信仰のあまりに薄弱なるに驚ろく。(十一月廿七日の一節)

▲世に病程つらきはふしとは定理あり、殊更に云ふの必要なし、今の吾身に如何なる徴候が辛きか回顧して見んに、先づ痛くて困るは手術あり、二度とやらんには泣きたき心持す、次は坐骨神經痛あり、甚しくして不眠ふど起せる時は真に速死を欲す、次に咳嗽の苦しみも豫想外のものなり、一度咳出づるや、談話も食事も書讀む事もあつたものに非ず、常に咽のあたりナリ／＼として物あるが如く、匙の如き者にて掻き出し度き心持す。益々劇しく出づれば、腹痛み、食慾減じ、冷汗淋漓たり誠に病人の大患あり。

次に裏急後重も苦しき事他に譲らず、甚しき時は肛門部をエグリ取り度き心持す、熱は時に余の遠くあることあれば左程苦しからず。(十月二十六日)

君が病床日誌の一段落は實に此十月二十六日の一節を以て終る即病苦日に通み衰弱月に加はつて思ふまゝに筆取る能はざりし故と見ゆ、然るに君が嚴父よりの書信に依れば本年一月二十一日即君が瞑目の日の三日前(十九日に於て最後の執筆をなしたりと、而して君が日誌の最後を見るに悲惨なる哉遺言二件易が正しく君が絶筆からんとは謹んで記す。

▲我墳墓

我墳墓は獨立でありたい。

我墳墓の地は先祖代々の傍。

墳墓は正面、南無阿彌陀佛。

右側面には明治何年何月何日没、醫學得業士猪飼善助。

享年何拾何歳、左側面は辭世。

大きのことは適宜でよろしい。

▲屍体の解剖

一、屍体解剖に附す。

二、場所は何處にても善し。

三、一般開放とす。

四、標本は屍体の尊嚴を傷げざる限り採取せらる可し。

* * * * *

通信

●山本直枝氏通信

(福田美明氏宛)

氏は明治四十二年醫學科卒業内科二部研究生として勉勵大に修得せられしが、蹶然志を立て東部に遊び入澤内科介補として専ら内科の蘊奥を研めつゝあり目下東京本郷區四丁目四三富士館に下宿大學に通學中あり尙ほ同所には同級生塚本政治氏あり同じく入澤内科介補を勤務中なり。

御歸院後は殊に御忙敷事と存上候、東京の大火は已に御聞及の御事と存候誠し物懐き計りにて七時間に燒きたる戸數七千に達し慘狀目も當てられず候、多分御見物被遊候事と存じ候ま、昨日と今日の變化のすさまじき事御覽に入候

●在京同窓通信

御書面雖有拜見致候處實兄益々御清榮奉大賀候次に小生等兩人無事消日端在候間御安神被下度候

扱而貴人には御上京當大學へ御入科の御希望の由至極御賛成申上候然し當大學内に於て專門校出は誠にミジメあるものにて介補と稱するものは謂はゞ大學では何とも認めて居らず誠に便りふきものに御座候又他校出が研究する様には出來て居らず只自分の介補たる本務を勉強するに連れて多少の便宜と好意を得るに止まり居り候、故に大學に居る間は何事も決して腹に持たず泣寝入の積りにあらざれば到底居たまるものにあらず、小生等兩人のみは他の介補と異なり頗る勉強して居る積りにて病室へも出入し過去一年間能ふ限り顔を出してため今日は何少醫局にも良を知られ、心置きなく話す様になり従つて便利も有之候へ共やはり居候は居候にて母校にあるが如き又は病院にあるが如き得意ふものには無之一年間顔を合はず數十の看護婦中挨拶をやる奴は殆んど皆無是れは些事あるも萬事が一事この種の寂寞を感ずる次第に御座候他の介補は醫局に接近せぬが外來以外の見聞は無之候然し大學は大學だけありて患者頗る多數に昇るため一般の内科を汎く見る上には頗る便利にて然かも内科一般に亘り一年も居れば本に書いてある位の疾病は一通り見るを得べく候、故に大學に來たる事は小事を詳しく研究するには全く不可能にて只廣く見る事に利益あるのみに候故に開業希望者又は一般内科を汎く見後外國等にて「アルバイト」をやる希望の

もの又は病院にて奉職せんとするものには頗る利益あり學者的研究は昔日駄目に御座候、介補は目下入澤内科には殆んど満員あるも六月頃迄には少々減する見込に有之候入澤内科は他の科に比しいくらか吾々に便宜ある様に見受け居り候時期は何時にても關はず然し暑中休暇は頗る患者數多きに稍利益あるべく候故其れ以前の御入科可然と存候介補の勤務は處方を書く事に検査物をやる事が義務あるも大學は患者を自由に見る事を得るが故患者を待たせて置いて診てやる事は自由ある事なり又介補の利益は只此内にありと存候研究云は吾人に向つて立てられたる研究室おし故に校にて検査物一般を習得する上東京する事頗る肝要にて小生等も半年母校にありし事は此上なき利益と存じ候處方はラテン語にて書かればならず此入事事は暫くやれば雜作おし病院連中との關係は皆無あり内科にても三内科何等の關係なし實際は同じ内科にても皆無に有之候所謂瀕子？三内科の差異は前述の通り特徴おし然しクリニツクや講義は何れを問はず内科だけ聞か得、クリニツクは多數の「デモンストラチオン」あるが故に頗る利益ありやリ方も丑校を差あり一週中新來二日(患者百五十内外)再來二日(患者五十位)二日彌診隨行(三等及官費の入院患者は教授の後に診察するとも自由あり)クリニツクは一週六面あり講義六面あり(三内科合して)

右様の仕末に御座候貴見の御目的に適すや否や疑問あるも金澤病院にあり仕事常にかばらずさりとて研究の設備もよく患者數の少なき處に居らるゝよりは寧ろ大學に來られたる方時間の經濟を存じ候元來日本にありては專門卒業業者の研究設備残念ながら皆無とあきらめ居り小生等も斷念致し他日外國へても行く事を空頼みに致し今は専ら廣く見るのみにて満足致し居候然し到底多年在學す價値無之一兩年にて充分察し候俸給を取る人にては大學より出る方最も得策にて八九十圓の月給ならは多々有之候故月給生活ては一度當地に來たる事利益の様に思はれ候大學にありては比較的讀書の時間多き故且つ周囲の壓迫有之爲自然勉強す傾き有

之候(然し小生等が勉強する云ふ譯ては無之候)故に御來京の上は精々御參考に經驗を御話し可致候實際小生等當地に來たりし頃は大學内にてたつた二人切り誠に様子も分らず便りよく思申候も目下母校各科通じて十一名に達し何れも同様の待遇を洩らし居候、小生等最早や一年と相成り候からは追て逃仕度に取りかゝるべく候、先は御答へ迄如此に御座候介補の巾のきかぬ事はよく御心得肝要に御座候貴兄等當節先生々々云はれ居るのには大學内の不得意誠に悲觀の至り人間と云ふものは常に不平の絶ゆるものなきは勿論あるも誠に腑甲斐おし泣かぬばかりあるも韓信の跨ぐりに比すべきか恥をかいて徳を取れに甘んずるか吾人は母校にて卒業以後の厄介を見て呉れぬ以上人の家に里子に來た積りて居らればあるまい即大學は人の思ふほど樂み得意なものには此れなく此点よく御覺悟あられ度代はりに利益は充分有之候

● 淺利善治氏通信

(松原教授宛)

時下春暖の好時季先生倍々御勇健奉大賀候偉大なる精力と斬新なる學説とを以て日々學生を指導被遊儀常に感佩致居候唯惜むらくは愚生等が親しく先生の溫容に接し御講義を拜聽するの光榮を得ざるを、下平先生は御歸校以來倍々御壯健校院の爲め御患瘵是又學生にとりては無上の幸福に御座候且多年の宿望たりし校の新築一部落成の由慶賀の至りに候降て當地同窓七日會も既に二ヶ年を経過し倍々盛大に相成申候目下會員十六名にて毎會欠席者なく實に愉快に御座候今回御病院研究由より御來院に相成候諸君鈴木英男君(眼科)鈴木正孝君(關西病院)船移正平君(内科)福村深教、和田政節の二君は(杉田病院)松田正三君(小兒科)冬日々獨持の性質持倆か發揮し仲々愉快に御座候

次て卒業生の社會に於ける地位は一般に他の諸校卒業者に比し學力に於て

は優るも劣る者なく唯最近大阪高醫卒業者に比し獨逸語學力の遜色あるは將來實に憂ふべき点に有之候間今に於て當局者の猛省を希望致候尙又在校中藥物學並に臨床上に於て藥名は悉く其學名を日々使用す可き様特に學生に御注意願上候金澤病院は院方のある爲め直接實地處方に際し學名記入の必要を感じざる爲め本校卒業者の大部分は藥物の學名に暗く不自由を感じ申候是又獨逸語と共に最大急務の事と存候右様の義は先生に於ては夙に御存知の事に候へ共有の儘を申上候間多少御參考共相成かき存候尤も茲兩三年後の卒業生は凡て優良の様聞及び居喜び申候

●高木安治氏通信

(福田美明氏宛二十二日着)

高木君は明治四十一年度の卒業にして直に富山赤十字病院内科醫員として澤崎學士の下に勉學目下内科首席醫員として令名あるの人頃目一書を送り來れるの中左の一片あり録して其好意を謝す。

四月醫事日記

三日。山崎太一氏(四十一年度卒業富山赤十字病院醫員眼科)熊本縣醫に轉任に付送別會を同窓生にて開く集令人數十六名

五日。我病院の落成式あり、恩師山崎教授金澤より出席せらる

六日。山崎太一氏に對する病院の送別會あり

十二日。同氏出發見送人多數甚だ盛大かりき

十八日。荒川(正雄)氏(四十三年度)山崎氏の後任として來任せらる

十九日。奈良八郎氏(三十八年度)金澤に轉任の報あり

二十二日。同氏送別會ある筈

過日上京の折御手紙有難く其後御土産を待て居ます來月の廿一日北陸醫會には會者常離の實行を期待す、云々。

●和田政範氏通信

(福田、石譯兩氏宛)

一別正に百日に垂んとして世は既に春めき來り申候御近況如何に御座候や觸るべからず觸るべからず青き書生眼にて見たる社會は何事も何物も一切青く恬淡にして且つ生氣あるものに見ゆ申候へ共一度此眼鏡を投すればあれ見られぬ何物も暗き灰色を呈するを願ひ得べくんば一生現實社會には觸れたからざるものに候金澤にて見たる琵琶湖は清冽玉の如き水ふりしに來つて現實に觸れたる殺那の感情は汚い泥水!! 金澤の天地金澤の空氣が暮ほしく候當然内科に居るべき筈の小生は猶ほ外科に居申候何の故に然るか小生自ら解する能はず候赴任當時は一ヶ月間外科在勤を承諾せしも得て社會は斯くしたるものあるべく候灰色の雲翳く中に三ヶ月を経申候外科醫員の仕事は終日椅子に椅つて五級(拾五錢三級(參拾錢)と云ふ級名を以つて處置料を規定せる一枚の紙片を患者に渡すのみにして治療及診察にはたづさはる權利なき者に候唯時々友人より醫學雜誌を借り讀み得る時のみが醫學に面をあはず折に候中學を出で二年ある日英語の力の甚だしく消褪せるに驚きたる小生は醫學卒業後四ヶ月にして吾が獨逸語のいたく衰へたるを覺て慄然として肌に乗を生じ申候嗚呼春宵夢成りがたく候——夢成るを得べけんやに候昨夜計らずも松原先生の金言を想起任申候「苦しまざるべからず苦しみの極点に於て醫學的地歩の第一歩を求め得」と云ふ如き意味を卒業式の前日に聞申候小生も愈々當地を去べく宣言致申候御存知の一家の事情上止むを得ざるに座すと

は表面の口實實は轉科事件等が小生をして決意を余義ふくせしめたる次第にて候向後小生は何をふすべきや

開業可なり資なきを如何せん研究可なり資なきを如何せん恐らくは漂浪生活の第二步を更に南方に取るからん御存念被下度候「當つて碎ける碎けて苦しめ」

所謂苦みの頂上に於て健實なる研究(豪さうに聞ゆれど)の第一歩を得るに至るべく候不甲斐なき小生目下の状態何卒御憫被下度さも云ひ兼ね候小生に此様お和歌が御座候

乱れたる心を懐き石一つ

力の限り投げて見しか、

松原先生へ宜敷御鶴聲被下度候奥山吉川両君へもよろしく終はりに臨んで小生の醫學的刺戟の最大味量を受けたる小原先生易簧の報を得て痛惜措く能はず候御両兄足下御健在ふれ。

此書は大分以前に頂いたものだ、和田君は堅く／＼雜誌などに載する事を禁ぜられた、が將に父母の膝下を去り今や濁々たる世流に投ぜんとする予等に取り果た亦近き將來に於て同経路を辿るべき學生諸氏の爲め、此一書を暗中に葬むるを得ないのである、爲めに悪くいとは知りつゝも茲に掲げた次第である、和田君から恐りを受くるは覺悟の上の仕事だが、今後通信をせぬぞと云はれては大變だから、深く紙上で公に御わびを申して置きます。(福田記)

* * * * *

人事

○高木琢磨氏の計 明治四十年本校醫學科卒業直に宮田外科部醫員となり永々耳鼻咽喉科を研究し七尾病院外科主任として轉任次で昨夏高岡市に於て得意の腕を頼りに開業せられ名勢日に高まりしに不幸病魔の襲

ふ所さふり本春突然逝去せられたり謹んで哀悼の意を表す(詳細に至りては知友中村氏の筆あり本誌漫録に其微を盡せり)

○今村文積氏の計 氏は滋賀縣の産去る 四十年醫學科を卒業せられ直に山崎先生の下に内科を研究し夙に勤勉家を以て名あり衆望高かりしに四十三年五月江沼病院へ榮轉同九月高岡東病院へ轉下内科主任として敏腕を振はれつゝありしに健康を害し去る四月八日突然逝去せられたり享年二十八歳實に盛りの花の好晴を得ずして空しく浮世の風に弄ばれて散りたるが如く悲しまざるを得ざるふり殊に資性溫良篤學勵行の士に於てれや茲に滿腔の熱情を捧げて哀悼の意を表す尙ほ舊友相斗り紀念圖書購入の議ありと聞く。

○山崎教授 病院視察の爲め去月上旬上京二十日御歸院せられたり
○高安校長 石川、松原兩教授 是學會參列 出演の爲め去月二十八日上京本月九日歸院せられたり
○本會員の學會參列 藤井亥之助、岡本京太郎、北川健三、渡守貞、八田智証、島田吉三郎、敷波重治郎、丹羽直、城石健治、玉森法靈、中島誠、等の諸氏は學會參列の爲め上京せられたり。

○金澤病院醫員學會參列 簡保二、福田美明、石川精一、佐竹秀一の四氏は學會參列の爲め上京を命ぜられ松原教授に同伴して去る廿八日上京四月九日歸院せられたり。
○ドクトル 竹中繁次郎氏 (二十九年卒業) 大學生理學教室に於て研究中の氏は今箇東京本郷區金助町に於て開業一般内科の診療に従事せらるゝ筈。

○堀井吉平氏 (三十五年卒業海軍大軍醫) 金澤病院婦人科醫員囑託の氏は今回辭職郷里高岡市に於て病院組織を以て開業せらるゝ由。
○奈良八郎氏 (三十八年度) 富山に於て開業の所今回金澤市野町に

開業せらるゝ由。

○額又太郎氏

(四十年度)大學外科及山口縣某醫院醫員を経て金澤病院内科二部に研究中の所今回金澤市に於て開業せられたり。

○寺田久十郎氏

(四十一年度卒業)富山赤十字支部病院醫員の氏は本月初旬救護員講習の招集に應じ出京同講習に列し歸富せられたり。

○山崎太一氏

(四十一年度卒業)同支部病院眼科に奉職の所今回熊本縣衛生技師に招かれ四月十二日出發せられたり今後氏の手腕に待つ所大

あり願はくは自愛攝生大に國家の爲め公衆の爲め盡力せられむ事を望む。

○今井外吉氏

(四十一年度)石川縣小松町勝木病院に奉職中の所二月小松町本鍛冶町に於て開業せられたり。

○上木隆基氏

(四十一年度)目下東京大學佐藤内科に研究傍ら本會員ドクトル竹中繁次郎の經營せらるゝ國民醫院へ通勤せらるゝ筈。

○古屋與三氏

(四十一年度)德島市古川病院醫員の氏は古川博士に同伴して學會參列の爲め上京内科學會等に出席せられたり。

○近藤清吾氏

(四十一年度)今回再び内科二部醫員として活動せらる事さかりぬ氏は昨年志願兵として入隊せられしも病氣除隊さふられしより願はくは保養を旨とし健康を林に復せられん事を祈る。

○田山退二氏

(四十二年度)去月下旬福井縣吉田郡西藤島村地藏堂に於て開業せられたり。

○那谷與一氏

(舊姓、北川)四十三年一月卒業後松原博士の下に専ら神經病學精神病學等研究の所今回雄志を立て東部山田博士の經營せらるゝ病院に奉職せらる事とあり去る四月十二日新橋直通列車に乗じて上京せ

られたり同夜は松原博士石坂直次郎氏神經科醫局員看護婦一同並に親類知已等多數の見送り入ありき願はくは那谷兄の益々勉學奮勵斯界の爲め努力

發展せられむ事を望む。

○中本和三郎氏

(四十三年)卒業後眼科醫員勤務中の所去る二日

七尾神明病院眼科主任に赴任せられたり。

○荒川正雄氏

(同年)富山赤十字支部病院眼科醫員を奉職せらる。

○高田信弘氏

(同年)内科二部に研究中の所昨年脚氣を以て醫界の問題さかりし能登和倉船倉島に赴任可憐なる海士の健康を護る事さかり五月七日出發せられたり聞く同島は海上十八里の小島衣食住共に大に内地と

趣きを異にするを願はくは自愛以て護島の神を仰がるゝ様希望に堪はず聊か書して送別の辞さふす。

○和田政範氏

(四十三年度)内科一部研究生より彦根病院醫員へ轉任の氏は今回神戸市杉田病院へ轉任せられたり。

●北陸醫會開會順序 來る五月廿一日午前八時より、富山市に於て開催すべき、第十一回北陸醫會は、左の順序

に依り開會の豫定なりと。

一、會場 富山市總曲輪富山縣廳構内縣會議事堂

一、開會時日 五月廿一日午前八時より午後四時迄

一、懇親會 同日午後四時三十分富山ホテル

一、參觀 五月廿二日(會場に揭示す)

一、出席及演說申込 五月十日限富山市日本赤十字社富山支部病院内澤崎寬制宛

但 一、演說申込と共に演題通知のと。二、當日は必ず原稿御持

參のと

會 告

○自明治四十四年二月十七日校外特別會員會費調書
至全 三月廿五日

金額	期	氏名
金參圓	自四十三年度至四十五年度	水谷浩一君
金參圓	全	磯貝一實君
金參圓	自四十四年度至四十八年度	御堂實成君
金參圓	自四十三年度至四十七年度	阿部憲治郎君
金參圓	自四十五年度至四十七年度	折笠圓隆君
金壹圓	四十三年度分	高岡榮君
金參圓	自四十五年度至四十九年度	河合忠次君
金參圓	自四十四年度至四十八年度	高儀京治君
金參圓	自四十四年度至四十八年度	韓清泉君
金參圓	自四十四年度至四十八年度	吉池省吾君
金參圓	自四十四年度至四十八年度	近藤勇記君

次號雜誌發刊

六月十五日

次號原稿之切

五月二十五日